
何でも屋

ポテトバサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何でも屋

【Nコード】

N1910T

【作者名】

ポテトバサー

【あらすじ】

舞台は2030〜2040年ぐらいの日本。就職できずに大学を卒業してしまった男四人。就職できないなら開業してしまえばいいと『何でも屋』をやることに……………

さまざまな職業の依頼人が妙な依頼をこれでもかと持ち込んでくる。そんな依頼に幼馴染で腐れ縁の四人が立ち向かう！

未来と言ってもがつつりとしたSFではないので気軽に読んでみて

くだらぬ。

はじめり（前書き）

初の長編小説です。不安でいっぱいです……………

登場人物の詳細は

じゃーがいも 何でも屋

と検索サイトで検索すれば私のブログが表示されますので
そちらで確認してみてください。

それでは。

はじまり

「いや、裏だよ… そつ、いやだから銀行の先の通りだつて！」

修は相変わらずの知哉にイライラしながら、携帯電話をズボンのポケットにしまった。

「地元の道がわかんねえって何なんだよ」

イライラが修の歩くスピードを速くさせ、待ち合わせの店まではあと二十メートルほどとなっていた。

「よつやく看板が見えて…」

他の店を圧倒する喫茶店とは思えないサイケデリックな看板がそこにはあった。

『大宇宙君の銀河に恋してる』

看板にはそう書かれていた。

「あんなに看板派手だったけか？」

それと同時に、なぜ店名にサブタイトルがついているのかという疑問がわいてくる。それはこの店ができた当初、修が小学生のときから抱いてきた疑問なのだ。

「ん？」

店に近づくにつれ、修はあることに気が付いた。店の前を通る人々全員がサングラスをかけているのだ。厳密に言えば店の前に来たときだけサングラスをかけ、店を通り過ぎるとサングラスをしまう。こんな光景は以前には無かった。

「えっなに…?」

修は恐る恐る店に近づいて行く。歩くサングラス達がチラチラ修のことを見ている。

「何なんだ……」

パシッ!!

修は誰かに後ろから肩をつかまれた。

「うわっ!!」

驚きと同時に振り返った修の目には、ダンディーと呼ぶにふさわしい一人の男が立っていた。身長190センチはあるだろうか、かなり大柄だ。

「驚かせて申し訳ない。ただ、サングラスをかけていないようだったのですね……」

「サングラス……」

先ほどから修はサングラスのことを考えていたので、サングラスという言葉に違和感を覚えていた。同じ文字を書き続けていると「こんな文字あったけ?」となるのと同じことである。

「サングラスをかけてないと何かあるんですか？」

「彼を見たまえ」

修の問いに謎のダンディーは店の先からこちら側に歩いてくる男を指差した。何とも頼りなさそうなサラリーマンで、その男も歩くサングラスに見られて不安そうである。

「なんだ、あの人がどうなるんだ……」

そのサラリーマンが店の前を通った時、

うにゃあああああ！！

叫び声を上げ、目をおさえながら倒れこんでしまった。

「なっ……」

「そう、サングラスをかけずに店の前を通ると……目をかろく痛めてしまうのだよ」

「いやいやいやいや、軽くじゃないでしょあれは……」

「実は」

謎のダンディーは新たに別方向を指差した。その先には漆黒のビキニパンツを履いた、屈強な褐色の男たちがポーリングをしていた。

「……………」

「大宇宙君の銀河に恋してる」の壁は特殊な素材で作られていてね。その素材が反射する太陽光は健康的な日焼けにぴったりのだよ」

「はあ……」

「そして何より、店のご主人が世界ダンディー協会の支援者でね、店の反射光とその光が当たるスペースを提供してくださっているのだよ」

「はあ……」

「私と彼らはダンディー協会の中でもマッチョダンディー部門に所属していてね、健康的に焼けた肌そしてその肉体から『褐色の戦士』と呼ばれているのだよ」

「はあ……」

「失礼、話が長くなってしまったね。私は金剛寺・M・武志、Mは協会から頂いた称号、マッスルを意味している。では、私もよりダンディーにならなければならぬ、これはまた会った時にでも返してくれればいい、それでは失礼する」

金剛寺はダンディー協会仕様のサングラスを修に渡すと戦士たちのもとへ歩き出した。

「……………うん 俺は何も見ていない、何も見ていない」

歩くサングラスの一人となり、修はその店の扉に着くまで繰り返

しつぷやいた。

「うわっ……なんだよこれ」

シンプルな木製のドアからはエイリアンの腕のようなものが生えていた。血のような赤、苔のような緑と薄暗い白からなるデザインは、

「あつ、サングラスはもういらねえか」

………赤、緑、白とどれも蛍光色で不気味なものとなっていた。そしてそのエイリアンの腕こそが大宇宙への入り口となっている。

「うえー気持ち悪いな」

妙に手になじむエイリアンの腕を修は引いた。そのとき、予想外の懐かしい音が頭上から聞こえてきた。

カランコロンッ

大宇宙へ入った修はさらに懐かしい感覚になった。香ばしいコーヒーの香り、優しい木の温もりが修を出迎えたからだ。

「なんだ、良い店じゃないか」

「ピロピロッ！ー！」

「のわっ！ー！」

修の死角から女性が飛び出てきた。レースの可愛らしいエプロン

をつけているものの、頭には触覚付きのカチューシャをしており、首から下はサイケデリックでツルツルした全身タイツのようなものを着ている。

「お帰りなさいまし、艦長様!!」

「……………」

不安…………… そう、修はそれに憑りつかれた。

「すみません、ちょっと用事を思い出しました」

修はくるつと向きを変え、再びエイリアンの腕をつかみ大宇宙からの脱出を試みた。

「ピロピロ!!… ピロピロ!!…」

大宇宙から逃げ出そうとする修を、宇宙ティストな店員が腕をつかみ離さない。

「うわぁ何かピロピロ言ってるよ!!…」

「ピロピロ!!… ピッピロー!!… ピロピロ!!… ピッピロー!!…」

「うわぁピッピローのときだけ声が高いよ!!…」

恐怖…………… 修はそれに完全に陥った。

「うわぁぁぁ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

恐怖のあまり謝りだした修だが、大宇宙からの脱出を諦めたわけではない。右手にエイリアンアーム、左手にピロピロ星人。それも元の世界への扉は少しずつではあるが開いてきた。

「のおおおお、もう少しだ」

顔一つ分開いた扉の向こうでは『褐色の戦士』たちがポージングをしている。不可思議な光景ではあるが、それでも元の世界は元の世界なのである。が、その光景はぬっと出てきた何かに閉ざされた。そしてそれは修の顔を大宇宙へと押し戻そうとする。

「男ならば潔くあきらめることも大切だ」

「こ、金剛寺！！ おまえ！！」

「安心したまえ、ここはいたってノーマルな店だ」

「ノーマルじゃねえ奴に言われて安心なんかできるか！！ ふがつ
！」

修の脱出は失敗した。大宇宙では等速直線運動に敵わないのである。

「ピッピロー！！」

修はピロピロ星人に引きずられながら、艦長様一名と席に案内された。

「こちらがメニューになります！！ お決まりになりましたらピッ
ピローとお願いしますピロ」

「えっ…………… あっ、はい……………」

修はため息をしながらメニューに目をやる。

「…………… つたく、何だよこれ」

白い紙に薄い肌色で書かれたメニュー。修は読むのも面倒なので先ほどからいい香りをさせているコーヒーを頼むことにした。

「ピ…………… ピツピロー」

当然、修の顔は少し赤くなった。

「ピロピロピロー、お決まりですかあ？」

「えっと、アイスコーヒー」

「アイスコーヒーですね、アイスコーヒーはホットとアイスどちらにしますかあ？」

「えっ！？ じゃ…………… ホツ、ホットで……………」

「了解いたしましたあ！！ ピツピロー！！」

ホットを頼んだ理由はただの修の好奇心だ。

「何か疲れたなあ」

タバコに火をつけながら修は店内を見渡した。壁のいたるところ

には宇宙映画のポスターが飾られており、多くがサイン入りである。また、映画で使われたものだろうか古びた小道具も飾られてある。店員とドアノブそして外の壁以外は普通の店のようだ。

シャツ

突然、店内のカーテンが自動で動きだし、外からの光を遮断した。店内は都会から夜空を見上げたような真っ暗な空間になった。

「今度は何だよ……………」

パンツ

ピンク色のライトが店の一角を照らしヒップホップの曲が流れだした。そこにはブロンドの外国人女性がセクシーなポーズで立っていた。グラマラスでスパイシー、スウィーティーでプリティーな女性だった。胸元は限界まで開いており、下はこれまた限界のミニスカートを履いていた。

「な……………」

修はしばらく口を開けて見とれていたが、ブロンド美女が持っているものに気が付いた。

「ハイ、カンチョウサン、オマチドウサマネ」

そう言うと修のほうへモデル歩きをしながら近づいてきた。

「ん、オマタセネ」

アイスコーヒーをテーブルに置くのと同時に、修の膝の上に座り腰をくねらせながら顔を撫でまわす。

「ソレジャ、ソルジャー、ゴユツクリ！」

修の額にキスをすると、名残惜しそうにブロンド美女は店の奥へと消えていった。これがホットアイスコーヒーなのである。

「ピロピロ……！」

その声を合図にカーテンが開き、先ほどのいい感じの店内に戻った。

「あ、危うく俺のヒートロッドが反応しそうになった……………」

火照りをアイスコーヒーがほどよく冷ましてくれた。ようやく落ち着いてきたとき、修はあることを思いだした。知哉がまだ来ているのだ。

「まったく、アイツは……………」

ピロピロピロピロピロ……！

修の携帯電話が鳴り始めた。

「……………着信音変えよ、あーもしもし？」

「おう、今さ銀行のとこ曲がって来たんだけどよ」

「ああ、もうすぐだ、20メートルぐらい進めば右手に見えっから」

「おう、わかった。 んじゃ」

ピッー

修は電話を切ると首をかしげた。

「何かアイツに言い忘れていたことが…………… あっ」

サングラスのことである。

「どうすっかなー、あいつもあのサラリーマンみたく…」

カランコロンッ

目を軽くこすりながら知哉が大宇宙に入ってきた。

「どんな目してんだよ、あいつは……………」

修のいるテーブルは入り口から真っ直ぐのところにあっただので、知哉はすぐに修を見つけ、ピロピロ星人の案内無く修のほうへ歩いていった。

「いやー、あんまこっちらへんに来ないからよ、迷っちゃってさー」

「お前、何ともなかったのかよ？」

「あ？ なにが？」

「いや、すごかったら光？」

「ああ、すごかった。目がちょっとチカチカしちまったよ」

「それだけ？」

「おう、それだけ」

「どんな目してんだよ、お前は……」

「ピロピロ……！」

修の話にピロピロ星人が割り込んできた。

「おお、なんかすごい格好だな……」

「ご注文はありますでしょうか？ 艦長様……！」

「艦長様？ おい、修……」

「気にすんな、さっさと注文しろよ」

「えっと……」

知哉は白い紙に薄い肌色で書かれたメニューを見つめた。

「すみません、この惑星サンドイッチセットってケーキもついているんですか？」

「はい、こちらの中からお選びください。ピロ」

知哉は薄い肌色の文字をスラスラ読んでいた。

「どんな目してんだよ、お前は……」

「ん？ 何がだ？」

「何でもねえよ」

「あつすいません、それじゃロザミアケーキ」

「かしこまりました。 コーヒーはホットとアイスどちらにしますかあ？」

「アイスで」

「アイスコーヒーはホットとアイスどちらにしますかあ？」

「へっ？ えつと……… アイスで………」

「了解いたしましたあ！！ ピッピロー！！」

知哉もタバコに火をつけながら店内を見渡した。

「なんか、面白い店だな。で、何の話だっけ？」

「まだ、何も話してねえよ。 んーとだな、仕事の話だ」

店内のポスターを見ながらタバコを吸っていた知哉は、仕事と聞くとクルッと修のほうを向き、それから煙を吐き出した。

「仕事？」

「おう、仕事。俺たち就職できないまま大学を卒業しちゃったろ
う？」

「ああ、同窓会に行きにくいつたらありやしねえ……………」

「そこで考えたんだけどよ、就職出来ねえんなら俺たちで開業しまえ
ばいいんだよ」

「開業？ それは別にいいけどよ、何の仕事すんだよ？」

「何でも屋」

「何でも屋？」

「おう何でも屋」

「何でも？」

「何でも」

「ピロピロ？」

「ピロピロ…………… え？」

いつのまにかピロピロ星人が惑星サンドイッチを持って現れてい
た。

「お待ちせいたしました。惑星サンドイッチとロザミアケーキ

ですピロ」

「ああ、どうも。あの、コーヒーは？」

「今持ってきますピロ！」

ピロピロ星人は足早に店の奥へと消えていった。修はまたタバコに火をつけた。

「で、どうだ。やるか？」

「んー」

星空が描かれている天井を見つめながら知哉は考えていた。どうも気になることがあるようだ。

「何でも屋をやるのはいいんだけどよ、俺とお前の二人じゃ厳しくねえか？」

修はタバコを思い切り吸い込み、煙を知哉の顔めがけて吐き出した。

「どこにお前みたいなの、で・く・の・坊と二人だけで仕事を始めようと思う奴がいるんだよ。教授と大先生にも話はしたし、もちろんOKはもらってる。」

「それを先に言えよ！ だったら断る理由なんて微塵もねえ！」

「んじゃ決まりだ！」

そう言いながら修は左手の手のひらを上にして差し出した。知哉は慣れた手つきでその手を上から軽く叩き、叩いた後自分の手のひらをくるっと返し今度は修がそれを軽く叩いた。ランドセルを背負ってる時からの付き合いなら自然とお決まりのポーズも生まれる。

シャツ

お決まりのポーズの直後、またしてもカーテンが自動で閉まり店内は暗闇に包まれた。

「おい修、なんだよこれ」

修はその問いには答えず、ホットアイスコーヒーとアイスアイスコーヒーの違いを楽しみにしていた。

パンツ

青色のライトが店の一角を照らしグランジロックが流れだした。そこには赤毛の外国人女性が知哉に冷やかな視線を送っていた。グラマラスでスパイシー、マッドでクレイジーな女性だった。胸元は限界まで開いており、下はこれまた限界のミニスカートを履いていた。

「オマエカ、アイスアイスコーヒーヲタノンダノハ!!!」

そう言うつと黒いハイヒールをカツカツと鳴らしながら知哉へと歩き出した。

「コレガノミタカツタノカイ!!!」

アイスアイスコーヒーをテーブルに置くや否や知哉の胸ぐらをつかんだ。

「ノコサズニノメヨ！！ M F ガ！！」

そして、知哉に衝撃のデコピンが放たれた。

「いってえええええ！！」

「ソレジャ、ソルジャー、ゴユツクリ！！」

外国人女性は店の奥へと消え、ピロピロの合図でカーテンは開き元の店内に戻った。終始ニヤニヤしていた修は耐え切れず笑い出した。

「だっーははははは！ M F だとよ！ だ

っーはははははは！！」

おでこを抑えながら知哉は修のほうにくるっと向き直した。

「……………俺意外に好きだわ」

ピシッ！！

修の衝撃のデコピンが知哉を襲った。

「いってええええええ！！」

「どんな趣味してんだよ、お前は」

第一話 廃工場の謎 その1

未知との遭遇の翌日、修は知哉の実家で中華料理屋の『八番亭』に向かっていた。今日はそこで他の三人と待ち合わせなのである。大宇宙でもよかったが、すぐに何でも屋開店の予定地に向かわなければならぬため、また、二日連続で行くような店ではないために八番亭にした。

ガラガラガラ

「こんにちはー」

「おう、修君か！」

店主で知哉の親父さんの寺内勝（むねかつ）がカウンター奥の厨房から出迎えた。

「あれ？ おじさん、知哉は？」

「ん？ ああ、あいつなら出前に行かせたから、もう少ししたら帰ってくるじゃねえかな？」

「あ、そうですね」

修はカウンターの左端の席に腰をかけた。そこからは店内の上のほうに設置されたテレビがよく見えた。

「バカ息子から聞いたぜ、何でも屋だっけか？ やるんだってな」

「えっ、ああはい。どうなるかわかりませんがね」

「いいんだいいんだ、若いうちは何でもかんでもやってみるこつたあ。失敗しても年取った時に笑い話になってりゃいいんだからよ」

「おじさん…………… 良い事いいますねえ！」

「あのバカと一緒にされちゃ困るってんだ」

ガラガラガラ

また引き戸が音を立てた。

「ごんちはー」

「おお、こりゃ教授、早いお着きで」

「あー、どうもおじさん」

教授というのはもちろんあだ名である。教授の本名は^{おおつか}大塚渡^{わたる}、察しはつくだろうが、信じられないほど頭がいいので教授と呼ばれている。

「ううー、なんかもう夏って感じになってきたなー」

「だな」

両腕を上げ、伸びをしたまま修の横の席に座り、座ると同時に腕を下げた。そして腕を下げた同時にまた引き戸が音を立てた。

ガラガラガラ

「こんにちは……」

「あーら大先生、早いお着きで」

「あ、どうもおおじさん……」

大先生というのもあだ名である。大先生の本名は水木重^{みずき しげる}。これまた、察しはつくだろうが有名な妖怪漫画家からきている。本人も無類の妖怪好きだ。

「うう…… なんかもう……」

重は首の後ろを擦りながらカウンターの席に腰を掛けた。

「春ももうおわりゆになっちえき……… ねー」

「ねーって、なんて言ったんだよ!」

重はよく言葉を噛む。

「ねえ大先生、店に来るときに俺のこと見えてなかった?」

「えっ?」

「いや、俺が入ってきてすぐに大先生も入ってきたからさ」

「あ、うん…… 見えてたよ」

「じゃ、教授に声かけりゃいいじゃん」

「かけたよ……」

「……………」

「……………」

多分、いま話をしているぐらいの音量で声をかけたんだろうーな
ー。二人の沈黙はそれを意味していた。

「まっいいや。あれ？ 修は何か頼んだ？」

「おっ、そういやまだだ。んじゃ、おじさんチャーシューメン」

「あいよ」

「俺はー、タンメンで」

「あいよ」

「えっと僕は… 辛味噌野菜炒め」

「あ、あいよ」

重はその店で滅多に頼まれないものを頼み、店側を驚かすことがよくある。

「なんでいつも、冷やし山菜の三色茶そば、みたいなもんを頼むんだよ」

「えっ？ 冷やし山菜の三色茶そばあるの！？」

「ねえよー！！ そうじゃなくて、だから… もういいよー！」

ジャーツ ジャーツ

「ほい、おまちどー！」

あつという間の早業でチャーシューメン、タンメン、辛味噌野菜炒めが出来上がった。

「相変わらず早いなー、おじさんは」

「どこぞの牛丼屋には負けてられねえからな」

三人は割り箸を割り、そろって「いただきます」を言ってから食べ始めた。

「で修、これから行く開店予定地ってどんなところなの？」

「ん？ 小規模な廃工場だよ。昔は小さい金属部品の製作工場だったらしいんだよ」

「へー、修はもう見に行ったの？」

「おう、なかなかいい感じのところだったぞ」

「ゴホッ！ でもよく見つけたねそんなどゴホッ！」

辛味噌にむせながら、メガネの位置を上げながら重が聞く。

「あれ？ 言ってなかったけか？ 俺のおじさんが不動産屋をやつてんだよ。それでいきさつを説明して見つけてもらったんだよ」

「ゴクゴクツ… プハー。なるほどね、おじさん水もらえます？」

「あいよ」

ガラガラガラッ！

引き戸が勢いよく音を立てた。

「ふぁーあ… 出前から戻りやんした… あっ、なに飯食ってたよ！」

岡持ち片手に知哉が帰ってきた。渡と重は首だけ知哉のほう向き、修はイスをくるっと回転させ知哉のほうを向いた。

「おいおい、俺たちや客だぜ？ 口のきき方に気をつけな」

「はいはい、申し訳ありませんでした！」

「少しはピロピロ星人を見習えってんだ。ピロピロー」

知哉は岡持ちを置き、重の隣のカウンター席に腰を掛けた。

「ちっ、うるせーな！。 親父、俺チャーハン」

「自分で作れよ」

「え？ いいじゃねーか作ってくれたってよ！」

「金払えよ？」

「何で身内から金とんだよ！」

渡と重は首だけ知哉のほうを向き、修はイスをくるっと回転させ知哉のほうを向いた。

「客が偉そうに吠えるんじゃないねえ」

「何だってんだ！」

「つーか、もう行くぞ予定地に」

「一服ぐらいさせろよ！」

修もチャーシューメンを食べ終えていたので知哉と一緒にたばこに火をつけた。渡はそれを見ながら水を飲んでた。

「いい加減タバコやめたらどうよ？」

「はんつ、葉巻をふかしてる教授様に言われたかねーよ、なあ修？」

修は煙を吐きながら知哉を指差した。

「お前はやめろ」

「何だってんだ！」

「まっ確かに葉巻君には言われたかねーな」

修はそう言いながら親指と人差し指で挟んだタバコを回転させた。

「俺はたまーにふかす程度だからいいんだよ。けど修は特にへビー
スモーカーだろ？」

「タバコは俺の少ない楽しみの一つなんだ。好きにさせてくんろ」

渡はあきれた様子でまた水を口に含んだ。そしてふとあることに
気が付いた。

「ねえ、話は変わるけどさ、知ちゃんは何でも屋じゃなくても、こ
の八番亭を継げばいいんじゃないの？ 知ちゃんの兄ちゃんは小学
校の先生やってていないんだし… ねえおじさん？」

知哉の親父は切りかけていた長いままのナルトで自分の息子を指
した。

「こいつダメだ、頭だけじゃなく舌もバカだからな」

「あつ、そっか」

「何が、『あつ、そっか』だ。俺の舌のどこがバカなんだよ！」

タバコを灰皿に押し付けながら修はあきれた様子だった。

「ケチャップだよ」

「ケチャップ？」

知哉の『何のことでござる?』みたいな顔が修には腹立たしかった。

「オムライスに尋常じゃねえ量のケチャップかけてんだろっが!」
痛いところをつかれた知哉は目線を修のほうから窓のほうにゆっくりと運んだ。

「いやっ、それは」

「何が、『いや、それは』だ! いいからもう行くぞ! おじさんご馳走様でした」

代金をカウンターの上に置いた修と渡はあるものを黙って見ている。

「.....」

「.....」

「ヒーツ、ヒツヒツヒ、これは辛ウマイ..... おじさん水もらえます?」

「おめーはいーつまで食ってんだーよ!」
「バシッ」

「のわっ!」

修のボトルカッターつまりは手刀が重を襲った。

「ごめんごめん。あっおじさんご馳走様でした」

三人はあっさりとし知哉を無視し店を出た。

「だーっ、ちょっと待てよ！ ほい親父、前掛け！」

「おいバカ息子！ ったくアイツは……」

簡単にたたんだ白い前掛けを投げて渡し、三人の後を追った。

第一話 廃工場の謎 その2

パカパカパカパカッ

前を歩いていた三人は、後ろから迫るパカパカ音が何であるか見当はついていない。見当がついているだけに、立ち止り振り返るということはしなかった。

「ちよっ、ちよっと待てって！」

パカパカ音はそう叫んでいた。

「おい！ ちよっ… 待てってば！！！」

パカパカ音があまりにもうるさいので三人は立ち止り振り返った。見当違いではないことを確認し、修が口を開く。

「何だよ、うるせーな！」

「ハアハアハアハア……」

パカパカは、ハアハアに変わっていた。

「お前ら…… 店出てさらに俺がハアハア…… 店を出るまでの間スーハア…… 走ったろ！！ ハアハア…… じゃなきゃこんなに離れてるわけがない… ハア」

パチンッ！ ダダダダダダダッ！！！！

重が指を鳴らしたのを合図に、三人は再び走り出す。

「ちよっお前ら！！！！」

三人は20メートルぐらいダッシュをして止まった。

「冗談だよ、怒んなよ」

修が口角を軽く上げながら言った。

「まったく何なんだよ！」

渡はあきれた様子で知哉を見ていた。

「にしても知ちゃん、長靴ぐらい履き替えてくれば良かったでしょう？ パカパカうるさいし」

「えっ？」

知哉はそういわれてようやく店の長靴を履いたままなことに気が付いた。

「なんだよ、だから走りづらかったのか」

冗談が終わったところで四人は前二人後ろ二人に並んで歩き出した。

「あっ、そっだ修！」

「なんだ？ 大先生？」

「妖怪仲間からの最新情報なんだけど………」
「ごめん、どこの県か
忘れたけど湖で河童が目撃されたらしいんだ」

「ん？ 河童の目撃談なんて珍しくもないだろ。それに町おこしか
なんかだろ」

ニヤッ

重はいやらしい笑みを浮かべた。

「ただの河童じゃないよ……… 一目入道だよ………」

「!!!!!! マジかよ!!!!!!」

「それに、目撃したのは講演会でそこに訪れていた大学の教授なんだ。そんでもって、その教授が研究チームを作って一目入道の行方を追っているらしいんだ」

「おいおいマジかよー、俺も一目入道見てーなー」

ニヤッ

重の話に感心していた修は重を見ながら不敵な笑みを浮かべた。

「たしかに、一目入道の話は驚いた。だがな、こつちもUMA仲間から最新情報を手に入れてんだ！ 耳の穴を綿棒でホジホジしてよーく聞けよ！」

重は左ポケットから綿棒を取り出した。

「例えで言っただよバカ！ だからこの！ 止めてんにホジろうとすんじゃねえ！！」

重から綿棒を取り上げた。

「つたく、いいから聞けよ？ 仲間によると、新種の生物が目撃されたらしいんだ」

「どんなの？」

「キリンみたいで象みたいらしい。それに胴体は亀そのものなんだつてよ」

「なんだそりゃ？ 信憑性に欠けるな……」

くちばしと甲羅を背負い、頭に皿がある生物は信用しているくせに、こういった話を信じないのが大先生こと重なのだ。

「いや、本当らしいぞ。その新種の生物を探しに二人の学者が助手とガイドを引き連れてジャングルの奥地へと向かったらしいからな」

「マジで！？ それは信憑性があるな……」

「まあ…… それつきり行方不明らしいんだけどな……」

「……………怖っ」

修と重が妖怪&UMA話で盛り上がってれば、後ろを歩く渡&知哉も話は盛り上がる。

「知ちゃん、『I LIKE 数学』の新刊買った？」

「おう、買ったぜー」

「つーことは、前回の答案用紙も戻ってきたわけだ」

「おう、戻って来たぜー」

『I LIKE 数学』とは数学好きによる数学好きのための雑誌で、毎回1問1点で百問あるテスト用紙が付属されており、答えを書いて出版社に送るとマル付けされた答案用紙と全問題を解説した用紙が送られてくるのだ。

知哉は基本的にはバカだが、数学と体育は得意であったため3年前から渡と毎月、勝負している。

「それで、何点だったの？」

「98点……」

「かー、また98点!!! 詰めが甘いねえ」

「うるせーなー、3年間の問題が全部100点の奴のほづがどうかしてんだよ!!!」

「知ちゃんから聞く負け惜しみはいつ聞いてもいいねえ」

知哉はポケットから粒ガムを5粒取り出し、すごい勢いで食べ始めた。渡にまた負けたことに対してのイライラをガムにぶつけているのである。

「おい修！ まだつかねーのかよー!!」

「あ？ うるせーなー、もうちよいだよ。あそこの和菓子屋を右に曲がったらすぐだよ」

その和菓子屋を曲がるまでの間はどうでもいいような話が延々と続いていた。しかし、和菓子屋を曲がった時から修にとっては触れてほしくない話題になった。

「ほれ、あそこのモスグリーン色のやつがそうだよ」

「へー、いい感じじゃんかー」

想像よりもいい雰囲気の廃工場だったので、渡の声は1オクターブ上がった。また、知哉と重も同じだったらしく、修と渡を置いて足早に廃工場へ向かった。

「ったく、あいつらはガキか……」

渡は何かに気が付いたらしく、隣を歩いていた修の顔を覗き込む。

「のわっ、何よ教授!?!」

「いくらなの?」

「へ?」

「だから、あそこいくらで借りられるの?」

「…………… おいお前ら待てよ」

そう言っつて、先に行く二人へ小走りして近づく修の作戦は失敗した。

「いま、話をはぐらかそうとしたね……」

「い、いやー べ、別に」

「俺たちが借りられる物件の額はそうたいしたことはないはず……修の性格からいって、実家が金持ちな俺には金を借りないはず。仮にボンボンの俺の金をつかって借りたとしたらもつといい場所を選ぶはず…… ということはいわくつきか？」

渡の読みがすべて当たっている。当然、修ははぐらかそうと再度努力する。

「知ってか？ どの県が忘れちゃったけど、湖で一目入道が……」

「興味ない」

「えっと…… じゃあ、UMAの最新情報なんだけどよ……」

「興味ない」

「や、家賃の話なんだけどよ……」

「興味あるね」

努力というものは必ずしも実るものではない。修は諦めて立ち止

り、正直に渡に話すことにした。

「家賃の額なんだけどさー、その 円なんだ」

渡の目は点になった。

「 円？」

「お、おう 円」

渡は手のひらを自分に向けたまま両腕を高くあげた。そしてすごい勢いで両腕を振りおろし、自分の顔の前で小刻みに上下させた。

「どおおおおおんなー！！ いわああああくが！！ ついてんだよ おおおおおー！！！！！！」

その声は20メートル先ぐらいを小走りしていたガキ二人にも聞こえた。

「なんだ？」

「なんか教授が叫んでるね……」

家賃の額なんて気にもならない二人はそついいながら小走りを続けた。

「なんなんだよ！！ その値段は！！ 高校生が一月必死にバイトすれば稼げるような値段は！！ 小さな廃工場とはいえ工場だぞ！！ それなりの額がなきゃ借りられんぞ！？」

「おい、教授… あんまおつきい声出すなよ………」

「ぬおおおお！ 絶対出るんじゃないか！！ 元人間の人が………」

「いや別に出ると決まったわけじゃないじゃんか………」

「 円！！ 円だぞ！！！！ 出るに決まってるだろー！！！！ ゴホツゴホツ」

「だから、おつきい声出すなよ？ むせちまうんだからよー」

「あああああ！！ 信じられない。そんな物件がこの世に存在していたなんて」

渡はブツブツ言いながら歩き出した。渡は頭をかきながら歩き出した。修は渡を追いかけるように歩き出した。修はハァ… とう感じで歩き出した。

「なあ、教授？ あいつらにはまだ黙っててくれよ？」

ピクツとなった渡は修のほうへ振り返った。

「黙るも何も、言えないよ…… 八八ッ 八八八八ッ」

全然笑っていない笑い声が値段の衝撃さを語っている。

「おーい！ ちんたら歩いてんじゃねーよ！！」

知哉の声が遠くから聞こえた。知哉と重の二人は、家賃の値段の

話をしているうちにそのいわくつきの廃工場に着いていた。

第一話 廃工場の謎 その3

「なあ、大先生。どう思う?」

「自分の中じゃかなり高得点出てるね!」

「俺も俺も!! アイツにしてはいいところ見つけたよな」

ほんの少し乱れた息遣いが知哉と重の後ろに迫っていた。

「どうだよ、俺の見つけた物件は」

重も知哉もニコツとしながら黙って何度も頷いていた。そのうち、知哉がゆっくりと視線を渡に向けた。

「教授のご意見は?」

「えっ? ああ…… 良い感じだな……」

全く何も考えていない知哉と重だったが、さすがに気になることの二つ二つはある。

「修、俺も大先生も教授も気に入ったけどよ、俺らでも借りられんのか? 大体、月にするといくらくらいなんだよ?」

「円」

さきほど渡に金額を告げてから廃工場に着くまでの2、3分の間、金額の安さの理由を新たに考えていた。そして、納得をさせられる

だけの理由が出来上がったため強気に金額を告げたのだ。

「円!？」

やはり知哉の目も点になった。数字には強かったもので、ある程度の予想はついていたのだろう。その予想の金額より修の言い放った金額がはるかに下回ったため、点になった後は呆然となっていた。

「うへえー、円!？ いいねえそれなら四人で出し合えるね!! 仕事も本格的になったら余裕も出るだろうし!!」

他の二人とは違い重は大喜びだった。重はこういったことに関してはまるつきりなのである。重のその大喜びで知哉がはっと我に返った。

「いやいや! 安すぎるだろ!!」

「教授にも言われたよ……」

「さっき何か叫んでたのがそうか!」

「ああ、けど心配すんな。ちよろつと手を加えれば安すぎる理由なんて吹っ飛ばせるからよ」

修は伯父から預かっていた鍵を取り出した。二つあるうちの小さな鍵のほうを取り出した。その鍵には黄色い小さなビニールテープが張られており事務所シと書かれていた。

「まずはこっちの事務所からだ」

「あつ？ この建物もついて

円なのか？」

「いちいちうるせー奴だな！！ いいからシャッター上げんの手伝えよバカ！」

ギャラギャラギャラギャラー！！

耳が待っていた音をたてながらシャッターは上へと消えていった。するとガラスの引き戸が現れた。引き戸は4枚あり、両端の二枚は固定されており、中央の二枚が出入り用の引き戸になっている。その中央の引き戸には『前園精密』と金色の字で書かれていた。

「……………」

「……………」

「……………」

三人はシャッターが上がると同時に、少し曇った引き戸のガラス越しに中を見つめた。事務所内には事務用デスクとイス、数年前の9月で時を止めたままの銀行のカレンダーそれだけがあった。三人にはその光景がとても悲しく見えた。

「うう、前園精密さん…………… 大変だったんだなあ……………」

「そうだね…………… そうだね……………」

肩を落とす知哉に渡が慰める。町でたまに見かけるボロ家や潰れてしまった店。全盛期はどんなに輝いていたことだろう、どんなに活気に満ちていたことだろう、と知哉は前々から感じていた。

「前園精密さんのリベンジしてあげようよ…………… ね？」

重も知哉に慰めの言葉をかける。知哉は目を軽くこすりながら、その言葉に答える。

「ああ！ 見ていてくれ空にいるであろう前園精密！ 必ずやつてやるぜ！ ！」

知哉が空にそう誓ったとき、カチャッと鍵を開ける音がした。三人のやり取りを冷めた眼差しで見っていた修が鍵を開けたのである。修も前回、伯父に連れられて下見に来た際、一人で今、三人がやったことをしていた。では何故、修は冷めた眼差しを送っているのか？

ガラガラガラガラ……

引き戸は開かれた。

「よし、教授に大先生……」

「ああ、中に入ろう……」

「うん、入ろう……」

三人同時に前園精密跡地に足を踏み入れた。

「……………によええっええ！ ！」

「……………きえややおやー！ ！」

「……………ちよもらぬびー！ ！」

三人は意味不明な叫び声をあげて前園精密跡地から飛び出してきた。

呼吸を始めた。

「俺を前園に入れるんじゃねえ！！とかでけえ声で言うなよ？
近所の人たちに変なふうに思われるだろーが」

知哉とは別の位置で新鮮な空気を取り入れていた大先生が修のほうを見た。

「知ってたの修は？　こんなに臭いつて？」

「おう、伯父さんと下見に来たとき俺も一発お見舞いされた」

「で、臭いの原因は何だったのさ！」

重の質問に渡が続く。

「謎のキャベツだ」

「キャベツだあー？」

落ち着きを取り戻した知哉が修に近づいてきた。

「いやよ、伯父さんと来たときに二人してやられてさ、近くのコンビニにマスクを買いに行って原因探しをしたわけよ？　そしたら事務用デスクの一番下のでかい引出しにビニール袋が入ってて……」

「その中にキャベツが？」

鼻を何度もこすりながら渡は聞いた。

「おう。んでもってよー、そのビニール袋を持ってみたらさ」ちやぶんつ』て音がしたんだよ。随分の間、放置されてたんだろぅな…キヤベツから謎の液体が染み出してさー まだ臭いとれてなかつたんだな」

「おえーー 聞きたくないー」

重はさらに前園と三人から距離をおいた。離れていく重を見ていた渡はあることに気が付いた。

「これが安さの理由なの？」

「ああ、安さの理由その1だ」

「その1ってまだあるの？」

「そりゃそうだろう？ 臭いだけじゃあそこまで安くはならねえよ」

知哉は話を聞きながら、恐る恐る前園に近づく。

「んな事より、どうすんだよこの臭い…」

修の前蹴りが知哉を前園のさらに奥へと押しやった。

「しばれんつー！…！…！…！」

意味不明な叫び声と共に前園から飛び出してきた。

「おっ、叫び声が変わった」

知哉は修の胸ぐらを再度掴んだ。

「変わる変わらないで、俺を前園に入れるんじゃないか?!?!?!」

「悪かった悪かった。事務所はこれくらいにして、今度は工場のはうを見ようじゃねえか？ な？」

三人をなだめた修は工場の鍵を取り出す。工場の大きな引き戸は内側に鍵がかかっているため、修はまた知哉を連れて脇にある工場の普通のドアから中に入っていた。

「ふう、今度は臭くないな」

「だろ？ まあ随分使われてなかったから古めかしい臭いがするけどな」

「っーかよ、暗くて何も見えねえんだけど」

「ああ、今は電気止まってっからこれ使え、ほらっ」

修は小型の懐中電灯を知哉に投げた。

「うわっ、バカ!! 暗いのに投げて渡すんじゃないよ!!」

何とか受け取ったものの、知哉はなかなか明かりをつけられずにいた。

「ああ？ どうやって明りつけんだよ？」

「先端のヘッド部分を回すんだよ。ほらついた」

クルクルクルクルツ カタンツ コロコロコロコロ……

「おい！！ ヘッド部分が取れちゃったぞー!?」

「タコ！！ 回す方向が逆なんだよー!!」

「ああ… 転がってどっかにいつちまった」

「ったく、何やってんだよー!!」

そのころ、引き戸の前で待たされてる二人はそろって腕組みをしていた。

「他の安い理由ってなんだろうね?」

「さ、さあ…… 大先生は何だと思っ?」

「うーん、年数がかなり経ってるとか、ごみ置き場が近いとか、お墓が近いとか?」

「そんなとこだよね?」

「うん」

ガツシャーン ドカドカ ガツチャン

大きな引き戸の向こう側から何かにぶつかったり、何かを踏んづけたりする音が聞こえてきた。また、その音のほかにも文句の言い合いをしている声が聞こえていた。

「いいから引き戸を開けんぞ！」

「わかったわかった。んじゃ動かすぞ？　ンギギギギギギ！！！」

「あつ、わりい。鍵まだ開けてなかった」

「チツ、何やってんだよオメーは！？」

「うるせーうるせー！！！」

ギギ……　ギギ……　ギガ……　ギガガガガガ……

あからさまに重たそうな音をたて、工場の大きな引き戸はようやく重い腰を上げた。扉が少しずつ開くと修と知哉の姿が見えた。二人とも腕まくりをして、筋肉を浮き出させ扉を押ししていた。怪力の知哉と馬鹿力の修が全力で押さなければならぬ扉を、渡と重は面倒くさそうに見つめていた。

ギガガガ！！　ガシャン！！

ようやく扉を開けることに成功した。かなり力を使ったのか知哉は自分の腕をマッサージしていた。

「きちー。扉を開けたただけで腕がパンパンだぜ。腕立て2、300回を3セットぐらいやったときみてーだ」

「ふん、お前はトレーニングさぼるから腕がパンパンになっちまうんだよ」

開かれた引き戸から廃工場へ光が入っていく。それにより、ようやく廃工場の中が確認できた。その光は安さの理由その2を教えてくれた。

「きつ……」

渡はそこで言葉を止め、片眉を上げイライラした表情で安い理由その2を睨み付ける。重はというと何もしゃべらずただポーツとしている。

「なっ……」

知哉も今、廃工場の中を確認することができた。小さな懐中電灯、しかも、光を集めるヘッド部分がなくなってしまった懐中電灯では足元を照らすのがやっとだからだ。

「お、修…… 虫酸が走るぐらい汚いんだけど？」

渡は修のほうに視線だけを向けた。

「あ？ ああ………」

知哉は廃工場の中に入り、辺りを見回した。

「汚いの最上級だな………」

「でも」

重はゆっくり歩きだし、廃工場の奥へとゴミや廃材を踏みながら進んでいった。

「妖怪が出そうでいいね… クラボッコとかシロウネリとかさあ…」

「だな大先生… もうちょい奥に行ってみようぜ」

知哉と重はガラクタを押し分けながら奥へと進んでいった。引き戸のそばに立っている修に渡は近づいた。

「他には!？」

「へっ?」

「へっ? じゃないよ! 他にも理由があるんでしょ!?!? あと何個あるの!?!」

「5個ぐらい…!」

「5個!?!」

渡は手のひらを自分に向けたまま両腕を高くあげた。そしてすごい勢いで両腕を振りおろし、自分の顔の前で小刻みに上下させた。

「今ここで全部言えー!?!?!?!?!」

知哉と重は引き戸のほうを振り返った。

「何かまた叫んでるぞ?」

「だね…」

第一話 廃工場の謎 その4

カンカンカンカンカンッ

ようやく二階へとつながる階段に来ることができた大先生は4、5段上つてから一階を見回した。

「どうだよ？ 大先生？」

「うーん、ガラクタばっかだけど、まだ使えそうなもんが多いよ？」

「そっか、じゃここを借りることにしたら家具やらなんやらの道具はそろつてことだな？」

耳をふさぎながら修は知哉のもとへ歩いてきていた。その横をガミガミ言いながら渡が一緒に歩いてくる。

「だああああ！！ うるせーなー！！ 野郎のくせにウジウジ言つてんじゃねえよー！！」

「野郎とか関係ないでしょ！！ 残り5個の理由のうち、なんで最後の一つは言えないんだよ！！ 相当の理由があるからだろ！？」

「別になんだつていいじゃねえかよ！！ 俺らがここで、何でも屋を開くのに関係ない問題なんだからよ！！ いいじゃねえか、こんだけ安いうえに残されたガラクタもくれるって言つてんだから！！」

「そつだぜ渡？」

知哉が渡をなだめる。

「俺もその理由が気になるけどよ、安い分にはいいじゃねえか。ここにある使えるもの以外は買ってこなきゃいけないんだし、当分は金がかかるんだからよ？」

重は階段に座りメガネの位置をなおした。

「それに、ここ妖怪が出そうだし、俺は気に入ったけどねえー」

確かに、言われてみればそうなのかもしれない。渡はそう思ってきた。渡自身も折れなきゃいけないなと思っていたが、あまりにも安い金額だったので簡単には折れるわけにはいかなかったのである。

「……………わかったよ。けどその最後の理由が原因で問題が起きたときは、修が先頭に立って解決すること、それでいいね？」

「おっ、じゃここを借りるってことで決まりだな？」

ニヤニヤが止まらない修は三人の顔を見つめる。

「おっ」

「うん」

「オッケ」

三人がそう言い終わる前に修は驚愕のスピードで携帯電話を取り出した。ボタンを三回ほど押し、携帯電話を耳にあてた。その様子を呆気にとられたまま三人は見つめていた。

「あっ、もしもし？ おじさん？ 俺です修です。あっはい…そ

の件なんですけど三人の了解を得まして… ええ、三人もここ以外には考えられないって言うてて……」

また、修に言いくるめられた感じがした三人は同時に呆れた息を吐いた。それでも、四人で何でも屋をやることにはワクワクしていた三人だった。

翌日から何でも屋開店に向けての会議が開かれた。もちろん会議室は〇ん〇の臭いがしていた事務所の一階部分である。会議を始めから三週間、開店準備の多くは片づけに費やされた。工場のガラクタを整理しつつ、いかにすれば〇ん〇の臭いが取れるかの話し合いも進められた。

「ふう、何とか臭いもとれたな」

修は新品のフローリングの上で大の字になり、天井をにやけながら見つめている。

「そりゃな修、消臭壁紙に張り替えて、床に新しい簡易フローリング敷き詰めりゃ臭いも消えるわ。少しは感謝しろよな？ 張り替えに4日もかかったんだからよ」

壁紙の細かい部分を修正していた知哉は、脚立の最上部に座りながらボソツとつぶやいた。

「ふん、すぐに後ろ盾だすチンピラと親の七光りで威張ってるガキと一緒になんだよ。どっちもスゲーのは後ろ盾のほうと親のほう。つまり、偉いのは張り替えたお前じゃなくて消臭壁紙&フローリングのおかげなんだよ。大体、この臭いを消す案を出したのは俺だ」

修がそう言うてから、知哉が脚立の上からフライングボディープ

レスを繰り返すまでに時間はかからなかった。

ドカツ!!

「グエツ!!」

180センチオーバーの知哉が飛んで来ればグエツともなる。

ドカツ!!

「グワツ!!」

握力120オーバーの馬鹿力の修に吹き飛ばされればグワツともなる。

「重いんだよ!! お前は!!」

「うるせー!! お前が感謝… 感を出さねえからだ!!」

「感謝感? バカみてーな日本語を使つてんじゃねえぞ!!」

「黙れ、言語つーもんは時代時代に進化していくもんなんだよ!!」

「おめえみたいな馬鹿がいるから綺麗な日本語がすたれてくんだ!!」

「すたれてんのはお前の感謝の気持ちだろ!？」

「何で今は感謝感つて言わねーんだよ!! バカやつちまったて気づいたんじゃねえか!!」

「お前の日本語のレベルに合わせてやっただろうが!!」

「ふんっ!! レベル2のお前に言われたかねーんだよ!!」

買い出しから帰ってきた渡の『声がデカいんだよ飛び蹴り』が声デカコンビに炸裂するまでに、その時間はかからなかった。

「グエツ!!」

「グワツ!!」

「うるさいんだよ!! 引き戸全開で、外まで聞こえてんだよ!？」

吹き飛ばされた二人はノソノソと起き上がる。

「ほら、昼飯」

二人はそれを聞いた途端ビクンツとなり、渡が気付いたころには手に持っていたエコバッグは無くなっていった。修はエコバッグの中に入っていた5個の弁当を取り出し事務用デスクの上に広げた。

「知哉、先選べよ。その体で弁当一つで腹ふくれちまうんだからよ?」

「おっ、悪いな! んじゃこのカツ弁当にするかな」

「あっ! カツ取りやがったな? あとで一切れよこせよ」

「おっ、そんじゃ修もから揚げよこせよ」

二人は弁当のフタとお茶のペットボトルのキャップを開けた。割り箸の片方を歯で噛んでもう片方を手でつかみ割ると、うるさい声でいただきますを叫んだ。

「ただいまー」

ぬぼつとした声が渡の後ろから聞こえた。

「あれ、もう食べてんの二人は？」

「ふう、俺たちも食べよう大先生」

「そうだね」

重と渡は工場のほうから引つ張り出しておいたローテーブルに買ってきた弁当を広げた。

「にしても弁当5個って、修はよく食べるよね」

「冷やし山菜の三色茶そばをすすっていた重が感心する。」

「ん？ まあな、バカみたいに食ってバカみたいに動くことが俺の健康法なんだ。まあ筋肉バカはこれくらい食わないと力が出ないんだよ」

「知ちゃんはよく一つで足りるね」

「いやー、俺は食ったものを吸収する能力が人より優れてんだと思う」

重はポケットからラジオを取り出しスイッチを入れる。ラジオのスピーカーからは流行りの曲が流れだしてきた。

「だー、またその曲流れてんのかよ!？」

知哉からもらったカツを食べていた修は重のほうを向いた。

「しょうがないよ、今はこれが流行ってるんだから」

「流行ってるも何も、こんな厚みのねえ薄っぺら音楽の何がいいんだよ？ 学園祭の延長みたいな曲やりやがって。いや、学園祭の高校生バンドのほうが粗削りな感じでいいぜ」

「なんでこんなに曲が売れるんだろうか？」

渡の音楽的観念からではなく経済的観念からその言葉が出た。もちろん、重はそんなことには気づかない。

「この曲を弾いてるグループの売りは、『歌が上手い』『ストレートな歌詞』『現役大学生』『メンバーが美男美女』だったかな？」

5個あった弁当の最後の一口を口に入れていた修は、持っていた割り箸を怒りで粉々にしてしまった。

「なんなんだよ!! その売りは!？ 歌が上手いだ？ 声がある程度出てるだけじゃねえか!! 本当に歌が上手いってのは地声に近い声だろうが、しゃがれていようが曲と歌詞を直接、脳みそと心に響かせられる奴のことを言うんだ!!」

修の怒りはまだ静まらない。

「ストレートな歌詞だあ？ 全部の曲の歌詞がストレートなのは日本語を知らないただの馬鹿だろーが！！ ストレートってのは伝わりやすい分、歌詞の内容に近いことを経験した奴らしか共感できねえんだよ！！ 抽象的かつ具体的に表現して、聞く側の感情の際に触れるか触れないかまで踏み込む歌詞がドエレーんだよ！！ 現役大学生が何だってんだ！！ 歳なんざ関係ねえーんだ。どれだけ人として経験を積んできたかなんだよ！！ それにな……」

休みなくしゃべり続けたかと思うと、スーツと思い切り息を吸い込んだ。

「音楽で表現するのにハンサム・ブサイク関係ねーんだよ！！！！みてくれがカッコいいからカワイイからって音楽聞く奴の気がしれねーよ！！」

他の三人はその声をアツサリと無視してその間に昼食をとり続けた。重は無視しながらもその意見に同感だったのでカチリとラジオのスイッチをひねり、『懐かしフォーク&スプーン』にチャンネルを変えた。

「ったくよ、表現に関するもんには暑苦しいねー、修ちゃんは」

空になった弁当箱を、ゴミ用のビニール袋へ入れ出す知哉は嫌味つたらしく、ちゃん付けて呼んだ。

「お前がちゃん付けて俺を呼ぶなよ、気持ちわりーな」

渡は空の弁当箱を片すと、ローテーブル脇に立てかけていた革のビジネスバッグを手にした。パカッとバッグの口を広げ、大量の書

類を中から取り出した。さらに、バッグからアルミ製の筆箱を取り出し、0・3の細字黒ボールペンを掴んだ。

「昼飯も済んだことだし、修と大先生はホームセンターへ行つて必要な物を買つてきてくれる？ 俺は開店に必要な書類の作成するからさ」

「おう、わかった。じゃ行こうぜ大先生」

割り箸の袋から爪楊枝を取り出し、修はそれをくわえた。

「ヒヒヒ…… 山菜が冷えて…… ヒヒ…… ヒ、冷ウマ」

「だーから、いつまで食つてんだーよ！！」

修の右フィストバック、つまりは裏拳が重を襲った。

「のわっ！！ ごめんごめん、じゃ行つてくるわー」

「あいよ、気を付けてね」

渡はホームセンター組を見送ると、すぐに書類に目をやったが、ある視線に気が付いた。その視線には寂しげな感情が含まれていた。

「俺は……？」

「と、知ちゃんは…… 俺の手伝い」

「バカな俺にそんな書類の手伝いが出来んの？」

「いちいち携帯の電卓使うのも面倒だから知ちゃんに計算してもらおうかって…」

「……………俺にうつてつかけの仕事じゃなあい？ わ・た・る・ちゃん？」

「二人になった時だけ、ちゃん付けで呼ぶのや、やめてもらえる？」

「ブガルロオオンッ！！」

事務所脇の駐車スペースで軽トラが唸っていた。

「あれ？ 修、エンジンかからないけど？」

「ん？ もう一回やってみるよ？」

「ブガルロオオンッ！！…………ポンッ！！…………ブ……………」

「かかったけどポンッて…………」

「大丈夫だよ、ほら気にせずでっぱーっ」

でっぱーっとは出発のくだけた表現だ。おそらく死語だろう。

第一話 廃工場の謎 その5

ブロロロロロ……

ゆっくりと走り出した軽トラは、どこか懐かしい音を出していた。車内はタバコとコーヒーの臭いが充満していた。

カチリ

ラジオ好きの重は当然カーラジオをつける。

「……まーた流れてるよ」

「うーん、さすがに流れすぎだね」

「だろ？ 大先生もそう思うだろ？」

食後の一服に火をつけ修は外を見つめる。全開にしたパワーウィンドウから入る風が、紫煙を外に運び出す。軽トラは交差点手前で信号待ちの列に加わった。重はエンジンをきる。

「皆シャレた服着て歩いてんなー」

「修も少しはシャレた格好したらどう？」

「シゲに言われたかねえよ。シゲこそもう少し明るい色の服を着ろよ。人のこと言えねえけど」

重の手によって、エンジンはポンツと音を立ててまた走り出した。

「いやー、俺は顔が暗いつくりだからさー、あんまし明るい色は似合わないんだよね」

「別に大丈夫だろ？ 抜群に明るい奴がド派手な色の服着てたら暑苦しいけど、暗い奴が明るい色の服をきてりゃちょうど真ん中になるだろ？ バランスが取れてさ」

「修はもう少しスタイリッシュ&ファッショナブルな服着たらどう？」

「スタイリッシュ&ファッショナブルね、ああいう服はピチツとして嫌いなんだよ。何か締め付けられてる感じがしてさ」

「すこし大きめのサイズにすればいいじゃん」

「そうすつとだらしく見えるんだよ。だったら最初から少しだけダボついたデザインの服のほうがいいよ」

「うーん」

「それによ、スタイリッシュ&アズナブル？」

「スタイリッシュ&ファッショナブル！！」

「ああそうそう、スタイリッシュ&ファッショナブルな服にするとさ、ポケットが少なくていけねえや」

「喋りが古臭くさいな」

「よつするに、機能性なんだよ機能性。どんな環境にもある程度対応できる格好が好きなんだよ俺は」

「なるほどね」

「例えばよ、大工がスーツ着て仕事をするか？　しないだろう？

消防士が決死の覚悟で火の中に飛び込むとき、コック帽被ってエプロンして飛び込むか？」

「飛び込まない」

「だろ？　葬儀屋の女性スタッフがウエディングドレス着てくるか？　そんなことしたら喪主に張り倒される。皆それぞれその環境にあった、都合のいい格好をしてんだ」

「そう言われれば…　そうだけど」

「だから俺はスーツの意味がわからない。暑い日にネクタイだのなんだの締めてよ、汗だくになりながら営業先に向かってなんのメリットがあるんだ？　無駄に汗をかいてその分冷房だの、何本も冷たい飲みものだの買って貴重な電力と小遣い減らしてよ？　営業先の受付の子に『汗臭い』なんて思われて」

「確かに」

「スーツは確かにピシツとしてて社会人らしさ、仕事してます、という感じがあつていい。けどよ、別にスーツ着たからって業績が上がるわけじゃねえんだよ」

「なんだかんだ言つて、修が既製品のスーツ着れないから文句言っ

「ているだけでしょ？」

「……そうだよ！ そうなんだよ！！ 最近の服はいろんな体型に合うように作られていないのが腹が立つんだ！！ 大体な……」

「はいはい」

それは妻がダメ夫をなだめるような光景だった。一方、書類組の二人は一休み入っていた。

「ふう、肉体労働も疲れるけど精神労働も疲れるね……」

「まあ、俺は計算しかしてなかったから楽だったけど」

知哉は事務イスから離れ、のびをしながら外へと出て行った。午後の2時をまわり、何ともぬぼーっとした時間が流れていた。プールの授業が終わり、着替えを済ませ、濡れたままの髪で受ける次の授業のような感じである。プールで体が冷えて、本来暑い夏の日差しが心地よく感じられ、つつい眠ってしまうのだ。

「ふうー、風が出てきて気持ちがいいな」

風が吹いてくる大通り方面に体の向きを変えた知哉の視線に、10メートル先ぐらいだろうか、曲がり角の電柱付近で手で口を押えながら話している三人組のおばちゃん達が映った。眉をしかめながら何やら話している。

「あつ、誰か出てきたわよ？」

「本当だわ。大きい子ねー」

「やだわ、ガラの悪い… 悪徳な組合か何かしらねえ」

「前園精密さんを追いやった人たちかしら？」

「静かでいい街なのに、ああいうのが来ると最悪よね」

「本当だわ。この道も通りづらくなっちゃっわ」

何度も瞬きをしながら知哉は井戸端三人衆から目をそらした。

「お、俺ってそんなにガラ悪いかな……」

落ち込む知哉はもう一度三人衆へと視線を向けた。

「本当にガラが悪いですよねー」

「あら、あなたもそう思う？」

「思います、思います。まーた髪型やら服装やらが、ねえ？」

「そうそう、だらしがないのよー」

「サスペンスドラマで出てくるチンピラみたいなの？」

「ああわかるわー 『肩がぶつかった!!』なんて言ったりするわよね」

三人衆は四人衆になっていた。いつの間にか店から出ていた渡が新メンバーのようである。渡とおばちゃん達は時折、知哉を指差し

て笑い出す。知哉はむすつとした表情で四人衆へ近づぐ。

「お前は何をやってんだ？」

「まあ、見ず知らずのおねえさんたちの前で、はしたない口の利き方をして」

三人衆の一番の年長者の内海うちうみさんが渡の肩をポンツと叩いた。

「まあ！ おねえさんだなんて！ 褒めてもお饅頭ぐらいしか出ないわよ？」

そういつてカバンから取り出したものを渡に渡した。

「ちよつとこれ大福ですよ？」

「やだ、内海さんたらー」

「やだ、もう恥ずかしいわあ」

「おほほほほほほっ！！」

「おほほほほほほっ！！」

「おほほほほほほっ！！」

三人衆の高笑いは大通りからの風に乗り、遠くまで運ばれていった。

「……………」

知哉はあきれた表情のまま、四人衆の前で立ちつくしていた。

「冗談だよ知哉」

「何が冗談なんだよ」

「あつ皆さんこいつは見た目で損してるだけで、なかなかいい奴なんですよ」

「あら、お知り合いなの？」

「ええ、昔からの友人で、今度この廃工場と一緒に何でも屋をやるんです」

「何でも屋？」

その疑問符には知哉が説明役をかってでた。

「ええ、何でも屋です。法律に触れないこと、自分たちができる範囲内のことなら何でもやるんです」

「例えば…何かしらねえ？」

「例えばですね、犬の散歩に買い物、庭の掃除に部屋の掃除、ちょっとした修理や仕事のお手伝い、つまりは雑用全般です。あつ、あとですね、子供たちに勉強も教えてあげられると思うんですよ。何たってこの渡はですね、大学はあの国立の千葉新国際フレキシブル大学ですからね。略してチン〇フレ大…」

ドカッ

知哉は渡の左のスマツシユを受けて吹き飛ばされた。

「そう略してるのは知ちゃんだけでしょ！！ さ、工場の中でも見てください」

渡は三人衆を工場のほうへと案内した。起き上がった知哉はため息をしながらそのあとをついていく。

「3週間前に片付けだしたので、まだ少しゴチャついています…」

「あらー、でもお店っぽくなってるんじゃないの?」

「そうね、いい感じじゃない」

三人衆の最年少、倉科くらしなさんは工場の中を見ていたが、ふと何かに気付いて外へと出た。

「それにしても、もう少し外の壁も綺麗にしたほうがいいわねー」
後をついてきた知哉の耳にもその指摘が聴こえた。

「そう思ってますね、俺の塗装業やってる仲間に今度綺麗にしてもらうんですよ」

「あら、そうなの? 何色にするの?」

「ええ、そこにいる渡と一緒に何でも屋をやる二人の友人と話し合っただんですけどね、周りの景観を壊さないような控えめの色にしようということになって、青竹色に決まりました」

「青竹色ねー、いいじゃないの」

工場の中から超小規模な工場見学を終えた内海さんとさるわたり猿渡さんが外に出てきた。二人ともどこか楽しげな表情している。

「面白いのね工場って」

「そうね、こんなに面白いとは思わなかったわ」

「楽しんでいただけでよかったですよ」

渡も工場の外へと出てきた。三人衆はそのあとゴニョゴニョ言いながら工場をいろいろな角度から見ていた。そしてまた、時折指を指しながら笑うのである。

「何か、あのお三方は若いねえ」

その言葉に『へっ?』と渡は知哉を見る。

「知哉は熟女好きだっけ?」

「……ちげーよ。つーか熟女好きだったら若いねえとか言わないだろ」

「あっそうか」

三人衆は渡と知哉に近づいてきた。

「いやー、ちょっと前から気になってたのよね」

「そうそう、4人の若い男の子が前園精密跡地で何かやってるって」

「変なことやってたらどうしようかしらって言ったの」

「でも、安心したわ」

「そうね、何でも屋ってなんか面白そうだし」

「機会があつたら使わせてもらうかも」

渡と知哉はニコツとしながらしっかりとしたお辞儀をした。

「ぜひ、お願いします!!」

「ぜひ、お願いします!!」

三人衆もそのお辞儀と笑顔でより安心感を覚えた。二人も近所の人たちとは上手くやっていけそうだと内心喜んでいた。だがそのあとの内海さんの言葉で不安感が二人を襲った。

「それにしても開店するのはやっぱり大変なのね。昨日も夜遅くまで準備してたでしょ？」

「へっ？」

昨日は夕方には全員帰っている。

「私の家から、ここの工場の二階部分が見えるのよ。それで昨日ね、夜中にお手洗いに起きたの、そしたらこの工場の二階の奥の部屋に人影が見えて…」

「人影？」

「そうよ、黒っぽい服着た30代ぐらいの男の人が工場の窓から見えたの。その人ダンサーなの？」

「えっ？　なんでですか？」

「歩き方が『むーんうおーく』みたいだったから」

知哉と渡は啞然としたままの表情して固まっていた。

「前に歩いているように見えて後ろに下がるのよね？　あの人は前向きにもやってたけど…　あっ、それに途中の階段部分でもやってたわ…　どうやるのかしらね…」

「あ、あの…　それってどこの窓ですか？」

「えっ？　こっちの右側の四個目の窓よ」

「よ、4個目！？」

「内海さん！　そろそろ特売の時間よ！」

「あら、もうそんな時間？　じゃあたしたちこれで」

「頑張りなさいよ、応援してあげるから！」

三人衆は固まったままの二人をおいて大通りのほうへと歩き出した。三人衆が和菓子屋を曲がるまでの間も二人は固まったままだった。

スコスコッ シットンピー ポンッ

訳のわからないエンジン音が事務所の駐車スペースから聞こえてきた。

「……やっぱり修理出したほうがいいな」

「ホームセンターから工場までもたないと思ったもん」

「後で修理会社に電話して引き取りに来てもらっわ……」

「そうしたほうがいいね」

「んっ？」

修は工場の前で立ちすくむ書類組を見つけた。何かしらのことを視線で訴えているのはわかったがそれ以上はわからなかった。書類組を見つめる修を置いて、重はホームセンターで購入した雑貨を持ち書類組のもとへと向かった。

「買ってきたよー、ん？ どうかしたの二人とも？」

すぐに知哉が反応した。

「大先生、うちの工場の二階の窓って何個ある？」

「んー？ ちょっと待ってて……」

重は荷物を工場内に置き、階段を途中まで上り窓の個数を数えた。

「知ちゃん！！ 枚数じゃないよね！！」

「うん！！ 個数！！」

重は確認すると降りてきた。

「3個だね。右側も左側も3個だね」

「大先生、悪いんだけど右側の窓を外から数えてみて」

「へっ？ いいけど、何よ怪しいねえ？」

重は工場の右側に回り込み窓を数えてみた。

「1個、2個、3個、4個…… あっ！ 1個多い……」

その時、修の脳内にはいつもより多くの電流が流れた。だが、重の脳内はいつも通りの量の電流が流れていた。

「なにになになになにつ！！ ねえ！！ 窓が4個あるよ！！ 中は3個なのに！！」

重がテンションを上げながら三人のほうを振り向くと、知哉と渡は片足ずつ爪先を立ててグリグリと足首のストレッチをし始めていた。修は気まずそうな顔で言葉を考えていた。

「い、いや… そのー」

パチンツ ダダダダダダダ

修は自分で指を鳴らして大通りに向かって走り出した。

「待てー！！ お・しゃ・むうううううううー！！！」

「待てー！！ お・しゃ・むうううううううー！！！」

書類組は猛ダツシユで修を追いかけた。

「えっ！？ ちょっと！？ なによ！？」

重は訳の分からないまま三人を追いかける。

「くうーらー！！ 修！！ 待てー！！」

「しょうがねえだろ！！ 他に安いとこがなかったんだよ！！」

後ろからすごい勢いで迫ってくる質問に、修は振り返りもせず
答える。

「ちゃんと説明しろー！！」

渡はどんどん修との距離を縮めていった。これはヤバイと思った
修は、和菓子屋の手前で曲がることにした。少しでも追いかける目
標が見えなくなれば、諦めるのも早いだろうと思ったからだ。

「よし！！ ここでレフトターン… ふがっ！！」

和菓子屋の手前を曲がった瞬間、修の顔面はぬっと出てきた何か
に驚掴みにされた。

「男ならば潔くあきらめることも大切だ」

「なっ、金剛寺!! 何でここにいった!!」

金剛寺が驚掴みにしている間に二人が追いついた。

「確保!!!!!!」

褐色の戦士の活躍もあって修は書類組につかまった。修はそのまま金剛寺に抱えられ何でも屋へと連行された。

第一話 廃工場の謎 その6

「あれ？ 大先生は？」

工場の数メートル手前で渡は大先生のことを思い出した。急に走りだした三人を慌てて追いかけたはず。しかし、修を工場まで連行している帰り道に大先生の姿がなかった。

「んー」

渡と知哉は、ホームセンターやショッピングモールではぐれた家族や友人を探すかのように、途中の路地を覗きながら工場へ歩いた。工場に着くまで路地を覗き続けたが、大先生の姿はなかった。

「あっ」

知哉は事務所の中を覗いた。そこでローテーブルの向かいにある三人掛けソファでウーロン茶をすする重を見つけた。

「あっ、おかえり」

「おかえりつて… 途中で追いかけるのやめたの？」

「うん、疲れるから。それに俺、走るの遅いし」

「ったく…」

「で、修は捕まえられたの？ ってっわあ！！ 誰!？」

夕日に照らされ、ダンディズムが増した金剛寺を見れば誰もがそう言うだろう。

「驚かしてしまってますまない。私は金剛寺・M…… いや名乗るほどのものではない」

「いや、途中まで名乗ったじゃないですか!？」

「それでは失礼する」

逃げることを完全に諦めた修を重の座る三人掛けソファーに放り投げると、金剛寺はズボンで膝までめくり上げ、下腿三頭筋を見せつけながら事務所を後にしていった。

「何だったんだ……」

「さあ…… まああの人おかげで修が捕まえられたんだから良しとしよう。さて……」

渡は修が放り投げられたソファーの向かいにある三人掛けソファーに腰を掛けた。知哉は事務イスに腰を掛けタバコに火をつけた。ライター音がしたと同時に放り投げられた体勢のまま修が口を開いた。

「わかったよ…… 全部話すよ……」

修はようやくく体勢を変えてソファーに座りなおした。

「けど、その前に晩飯にしないか？ 出前とつてよ？」

「だーもうつー!! タバコに火をつける前に言えよ!!」

知哉は2、3度しかふかしていないタバコを慌てて消した。修は携帯を取り出しながら、三人に何を頼むかを聞いた。そして、登録していた番号に電話をかける。十数分だろうか、ようやく出前の力ブが事務所に到着した。

「お待たせいたしましたピロピロ!」

大宇宙君の銀河に恋してる〜が出前もやっているということを知った修は、誰が出前に来るのかを知りたいがために大宇宙を選んだ。

「あつ、ピロピロ星人だ!!」

「あつ、お髭の艦長様じゃないですか!!」

修は大宇宙の常連となっていた。読みづらいメニューから見つけ出したオリオンスパゲティにハマったためである。なので、店員のピロピロ星人も修のことを覚えているのだ。

「あれ? 今日は普通の格好なんだ」

「はいピロ! いつもつけている触覚はヘルメットの邪魔になりま
すし、あの全身タイツを着ているとお巡りさんに職務質問されるの
で...ピロ...」

「まあ、今の服装も可愛らしくていいけどね」

「本当ピロ? 艦長様にそう言われるとうれしいピロ!」

黙って見ていた知哉が耐え切れず口をはさんだ。

「お前とピロピロ星人のイチャつきなんてどうでもいいんだよ!!
早く理由を説明しろって!!」

その言葉にピクツと反応したピロピロ星人は、知哉の頼んだ普通のアイスコーヒーを事務デスクの上に置いた。そして、知哉の顔すれすれまで自分の顔を近づけた。

「へっ? なに?」

「普段はしないサービスですが、このアイスコーヒーをアイスアイスコーヒーにしてもいいんですよ? でくの坊艦長さん?」

「…………… す、すみません」

「ま、まあ… 許してあげてよ? 俺とピロピロの関係に嫉妬しているだけなんだから…」

修の言う関係とは、とつても仲の良い店員と客、それを意味していた。が、ピロピロ星人はそうは受け取っていなかった。

「やだ、お髭艦長様!!」

顔を赤くしたピロピロ星人は照れ隠しで修の顔を、

ゴウバシッ!!

グーで殴りつけた。当然、修は吹っ飛んだ。

「グアッ!!」

「もう!! みんなの前で恥ずかしいこと言わないでくださいピロ
!!」

さらに顔を赤くしたピロピロ星人は、ヘルメットをかぶりカブとは思えない加速で事務所を去っていった。

「な、なぜグーなんだ?」

相変わらずウーロン茶をすすっていた重がフウーとため息をつく。

「で? みんなに隠してることってのは何なの?」

珍しく話を進行させた重を見て、修は起き上がりソファアに座った。

「わかったよ話すよ。まあ、長くなるから飯を食いながらも聞いてくれ」

修は神妙な面持ちで語り始めた。

「この工場は俺のおじさんが経営している不動産屋が管理している物件、それは前に話したが、実はその前には違う不動産屋が管理していたんだ」

修はスパゲッティを一口だけ口に入れた。

「日本全国で中小企業のあり方が変わり、大企業とも張り合えるよ

うな時代になった頃の話だ。その時は前園精密じゃなく高砂精密という会社がここに入っていた。工場長には10歳も年下の奥さんも幼稚園児の女の子もいたが浮気性でな、愛人が数人いたらしい。奥さんは純粹な人で、旦那に愛人がいるなんて思ってもみなかった」

重のウーロン茶をすすする音が静かに響いた。

「何年間かは愛人の存在は誰にもばれなかった。が、ある日、愛人の一人がその工場長の携帯電話ではなく自宅に電話をかけてしまったんだ」

「あちゃー」

自然と知哉の口からその言葉が漏れた。

「愛人は電話に出たのが奥さんとも知らず、いつものように喋り出した」

『今度はいつ会える？』

『この間、買ってくれた指輪毎日つけてるの』

「そんなことを一方的に話し続けた。だが、話している最中に受話器越しに小さな声が聞こえてくるのに気が付いた」

ゴクッ

思わず三人は唾を飲む。

『お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ… お前は誰だ…』

「怒りのこもった声で何度も何度も繰り返していた。愛人は慌てて電話を切ったが時すでに遅し…。浮気はバレちゃった。怒りに震えた奥さんは旦那を問いつめる」

『あの女は誰なの!! いつからなの!!』

「奥さんの怒りは当然のことだ。人生で初めて付き合った人と結婚し、ありふれた生活だったが幸せにやっていた。中には一度や二度の浮気くらいと思う人間もいるかもしれない。だが、奥さんは許せなかった。旦那が隠していたのは浮気だけじゃなかったんだ」

渡はすでに箸を止めて話を聞いていた。

「何を隠してたの?」

「浮気相手に使った金は全部会社の金だったんだ。最初はバレない程度に少しずつ使っていたが、あまりにもバレないのでタガが外れたんだろ、会社の経営が傾くほどに使いこんじまったんだ。旦那はこの世にいながら地獄にいた。」

『給料を払え!!』 『会社を返せ!!』

「当然、会社は潰れた。真面目に懸命に働いてきたのに、愛人と遊んでたら金がなくなっちゃいました。会社も倒産します。そんなことを社員が納得できるわけがない。自分の妻は怒り狂い、愛人は別れたくないと泣きつき、外からは社員たちの怒号が聞こえる」

『どづ… とうすればいいんだ』

「だが、不幸は続いた。疲れきった母親に遊んでとはいえず、女の子はたった一人で遊びに行っちまったんだ……」

「おい…… まじかよ……」

知哉は苦い顔をする。

「そう、公園からの帰り道…… 交通事故にあつて女の子は二度と家には帰れなくなった。奥さんはもう何も考えられずにいた。何も考えたくなかった。子供の交通事故から1か月後、奥さんは工場でロップと台を使い…… 自ら命を絶った」

「……………」

「旦那はそれ以来一言もしゃべらなかつた。あれだけ怒っていた社員たちも、奥さんと女の子の不幸に、黙つてその旦那から遠ざかつて行つた。家族も会社も社員も失つた。生きる意味を無くしたその男を愛人は毎日、来る日も来る日も慰めそばにいた。だが、今の男には愛人などどうでもいい存在になつていた」

「私たち出会わなければよかつた。私はあなたのことをずっと愛してるから」

「愛人はそんな手紙を置いて男のもとから消えていった。孤独になつた男は、手放すことになつた工場に訪れた。すべてが上手くいつていた工場を一目見たかつたんだ。工場の明りをつけ懐かしみながら辺りを見て回つた。うるさく音を立てていた機械たちも今は静かに眠っている。男の目には自然と涙が溢れてきた。涙を流すまいと顔を上にあげた。その男のうるんだ眼に天井からぶら下がっている愛人の姿が映つた」

「なんつーとこ借りてんだよお前は！！ どう考えたってダメだろ
！！ アー！！？」

「どんな神経してんだよ！！ 俺が言った元人間が出るんじゃない
か！ アー！！？」

「前にも言ったでしょうが！ 妖怪と幽霊は全くの別物なんだって
！！ アー！！？」

三人は別々に修へ文句を言っていたが、たまに同じことを言う。

「もう大丈夫かなと思っただよ！！ 伯父さんもお坊さんにお被
いしてもらったって言ってたしよ！！！」

「元人間の人たちが無神論者だったらどうすんだよ！？」

「お被いだのなんだの関係ねえんだよ！！！」

「だいたい、先頭をきって解決するときはどう解決するつもりだっ
たんだ！！！」

三人の怒りはまったくおさまらない。修の言い返しも始まったの
で事務所内はすごいことになっていた。3対1の構図は次第に2対
2になり遂には四人がそれぞれ言い合う形になっていった。

「俺は最後まで反対したんだ！！ 大先生と知哉が賛成したんだろ
！？」

「頭のキレる教授が止めるべきだったんだろっ！！！」

「シゲは妖怪が出そうでいいとか言ってたじゃねえか！！！」

「だ・か・ら！！ 妖怪と幽霊は違うものなんだってば！！」

四人は休む間もなく文句の言い合いをしていたが、一瞬だけ息を吸うタイミングが合い事務所内は静かになった。そのとき、

ドウガシヨワーン！！

と、何かが倒れる音が工場のほうから聞こえてきた。

ビクンツ！！！！

ビクンツ！！！！

ビクンツ！！！！

ビクンツ！！！！

四人は同時に目を丸くして驚きながら、壁越しにはあるが工場のほうへとゆっくり振り返った。

キーツ…… キーツ…… キーツ……

錆びついたブランコを揺らした時のような音が、またしても工場のほうから聞こえてきた。四人は同時に唾を飲む。

「き、聞こえたか？」

修が聞く。

「聞こえない」

渡は耳を手で押さえたまま修の質問に答えた。

「聞こえた」

渡の代わりに重がちゃんと質問に答えた。

「渡、約束は約束だ。俺が先頭をきつて問題を解決する。だから……
一緒に来て頼む!!」

「わ、わかったよ……俺もあの時止めなかったし、一緒に行く……
ただ、先頭は任せるからね!!」

「……………教授が行くなら俺も行くよ。怖いけど……」

修は『重までもが行くって言ってんだぜ』という顔を知哉に見せた。

「くっ！ 何なんだよその顔は!! 行くんなら勝手にいけよ!!」

修は珍しく反論せず、工場のほうへと歩き出した。渡も重もそのあとについていく。あつという間に知哉は一人ぼっち。先ほどの話が知哉の脳裏に残り、明りがついているとはいえ事務所に一人であることがだんだんと怖くなってきた。

「お、俺も行くぞ!!」

知哉はすぐに後を追いかけた。そして三人が工場に入る寸前で追いついた。

「今は一人でいるほうが怖え……」

四人は工場の入り口に置いてあった傘をそれぞれ一本ずつ手にした。元人間相手に傘を使っても何の意味もないが、武器になるものを持っているという事実が欲しかったのだ。緊張と恐怖のあまり誰も喋らない。

「フウ…… よ、よし行くぞ？」

入り口の前で修は三人に言った。いや、三人に言ったというよりは自分自身に言い聞かせていたのだらう。

コッ

修の左足が工場内に入った時、渡が修の肩を掴んだ。

「ん？ ど、どうした渡？」

「声出しながらとか歌をうたいながらとか… 音を出しながらのほうがいいんじゃない？」

「そ、そうだな… んんっ！！ 麦わら帽子は…」

ゴッ！

知哉のげんこつが修を直撃した。

「イテッ！！ 何すんだ！！」

「もっと明るい歌にしろ！！ 名曲だが、どう考えたって今じゃねえーだろー！！」

三人は黙ってうなづく。

「何でもいい、気がまぎれるように思いっきり音を出してくれ！」

カンカンカンカンッ！
ガシガシガシガシッ！

「によほー！！！」

「かかってこーい！！！」

「ほれほれどうした！！！」

三人は思いつくかぎり音を出し続ける。修、渡、重そして知哉の順で一段ずつゆっくりと階段を上げる。一段上がる度に緊張と恐怖が増していく。それにあわせて音も大きくなっていった。そして階段の中間地点に着いたときである。

ドウガシヨワーン！！

四人の何かはすでにピークに達していた。その場で動きを止めピクリともしない。先ほどの音の余韻が残る中、修は意を決して足を踏み出した。

「うるさいぞー！！！！ お前らー！！！！」

「ぎゅー！！！！」

「ぎゅー！！！！」

「ぎゅー！！！！」

「ぎゅー！！！！」

階段の後ろのほうから聞こえた大きな声に四人はパニックを発動させた。

第一話 廃工場の謎 その7

バサッ！

「のお！？」

修の傘がパニックに乗じて広がった。その出来事に修は足を滑らせ階段を転げていく。修は重を巻き込み、二人は渡を巻き込み、三人は知哉を巻き込んで転げる。それはアニメにありがちなスキー場でのハプニングそのものだった。

クルクルクルクル！！ ガシャン！！

今度はボウリングの球のように床を転げていき、隅によせられていたガラクタの山に突っ込んだ。四人は球のはずであったがピンのように弾け飛んだ。当然、四人は気を失っていた。

「あ…… い、いやあ…… ちょっと？」

後ろから大声をかけた男は戸惑う。定年退職をし、ようやくゆっくりと生活ができると思っただけの矢先のこと、裏の工場から謎のアニメソングが大声で響いてきた。

「び、びっくりさせちゃったかな……」

静かにしると言いに来ただけなのに、男はそう思った。それは当然のことで、まさか自分の一声で若者四人が階段から転げ落ち、気絶してしまうとは思わない。

「あつ……………」

四人が目を覚ましたのは朝になってからだ。修は事務所のソファで目を覚ました。

「あつ！！ やつと気づいた！！」

「うーん…………… あの…………… 何がどうなって」

男はやつと起きた一人目に訳を説明した。

「ああ、なるほど…………… それでおじさんが俺たちをここへ？」

「いや、私だ」

「あなた、本当に何者なんだ！？」

朝日に照らされた金剛寺がそこにいた。

「そう、このダンディーな方に手伝ってもらってね」

「それでは私は失礼する」

またしても、筋肉を見せびらかしながら事務所を後にした。転げたときに痛めた左手を擦りながら修は金剛寺を見ていた。

「ったく…………… それにしても、何かすみませんでした色々」

「い、いやー こっちのほうこそ悪かったよ。みんな気絶させちゃって」

「いやいや、騒いだ俺たちが悪いんですから。まだ気絶してる三人には俺から説明しておくんで、おじさんは家に帰ってゆっくり休んでください」

「そうかい？ いやーなんか悪かったね、それじゃ」

裏のおじさんが事務所を後にしてから30分ぐらいが過ぎて、ようやく他の三人が目を覚ました。さっそく修は気絶してからのことを説明した。最初はぼんやりとしていた三人だったが、時間と冷たい麦茶が意識をはっきりさせていった。重はウーロン茶だが。

「で、どうするの？」

渡が口を開く。

「どうするって？」

「だって、気絶しただけでまだ何も解決してないじゃん」

「そつえばそうだな」

「こんなんどうかな？」

重がウーロン茶をすすりながら話す。

「冷たいウーロン茶ばっか飲んでると腹くだすぞ？」

「いいから聞きなつて知ちゃん？ 今日の夜リベンジしようよ。個々に対策を考えてきてさ」

「対策？」

修は空になったタバコの箱をクシャクシャにしながら聞いた。

「対元人間の作戦さ。四人それぞれに対抗できる方法を考えて、それを実行できる道具をそろえて今日の夜にまたここに集合するんだよ」

「んー 渡は？」

「俺は… うん、それでいい」

「知哉は？」

「オツケー、それでいいや」

「三人がいいなら俺もいいぜ」

修は手のひらを上にして両手を差し出した。他の三人も同じように差し出した。いつものお決まりポーズだ。

パシッ スカッ ポンッ スカッ

「何やってんだよ！？ ちゃんと手のひらを叩けよ！！」

「いや、知ちゃんが俺の右手を…」

「バカッ、修が俺の左手にだな……」

「違つつて、教授が僕の左手に……」

「それじゃー俺の右手が交差しちゃうだろーが!？」

初めての四人同時のお決まりのポーズはグダグダのうちに終わってしまった。やりなれていないことはするものではない。

「ああ!! もういいよ!! 解散解散!!」

解散した四人は個々に対策を調べ始めた。調べるといつても方法はたいして変わらない。それに関する本を読んだり、それに関する言葉、単語を検索したりと、そんなものである。

「ふうー、もうこんな時間か… 支度して向かうとするかな?」

修は二重にした大きなビニール袋を片手に自宅を後にする。自販機で買った缶コーヒーを飲みながらプラプラと歩く修は、和菓子屋の手前で知哉と出くわした。知哉は片手に大きなバケツを持っており、バケツは新聞紙とガムテープでフタがされている。そして、もう片方の手には柄杓が握られており、知哉は修を見つけその柄杓を振りだした。

「おう、準備してきたか?」

「おう、このビニール袋がそうだ」

二人は何でも屋へと歩き出す。互いに用意してきた物には触れず、これから来る夏について話していた。

「去年より暑いってよ」

「去年は涼しかったからな」

「ほんと、涼しかった」

「あつ、そういや蚊が半端なく増えるらしいぞ」

「まじかよ、ホームセンターで蚊取り線香安売りしてたから買っとくか」

「だな。にしてもだ、日が落ちてても何でこんなに暑いんだろつな」

「ヒートアイランドだろ？」

「ヒートアイランド？　なんだそれ？」

「説明してもらいてえーのか？　わかんないこと言われて余計に暑くなんぞ？」

「それもそうだな。まっ、クールアイランドになりゃいいってことなんだろ？」

「……………まあそれでいいわ」

「おっ！　修、もう着いてるぞあの二人」

事務所の蛍光灯に照らされた渡と重が、修と知哉に手を振っていた。

「修と知哉も手に何かぶらさげてるね」

「そうだね、てか教授は何も持ってきてないの？」

「道具はね」

「これで全員そろったな」

修と知哉が合流した。四人は何も言わず互いのことをジロジロと見ている。元人間相手にどんな対策をしてきたのかを見ているのだ。修のビニール袋の中身、知哉のデカイバケツの中身、その中身をすくうであろう柄杓、重の持つ高級デパートの紙袋、そして何も持ってきていない渡、気になる点はいくつもあった。そのため修はある提案をした。

「なあ、これから工場に入って対決するのによ、お互いの作戦を知らないまま実行するのはどうかと思うんだ。それぞれのやり方ってもんがあるだろうし」

「そうだな」

「だからよ、今ここで一人ずつ考えてきた作戦、対策を発表しようじゃねえか、な？」

「オツケー、じゃ誰からやる？」

渡の質問に、修はビニール袋を突き出した。

「言い出しっぺの俺からやるわ」

「んじゃ、ぶいぞ」

修は二重にしてあるビニール袋を開けながら説明した。

「この世の物の全てには弱点とか苦手なものがある。ナメクジに塩、悪魔に聖水、水タイプに電気攻撃、猫型ロボットにネズミ、アンパン男に放水…… あとドラキュラにニンニクとか」

知哉はドラキュラにニンニクのところで少しだけビクツとした。

「んでもって、元人間みたいなそっち系を浄化するためには何といつても塩だ!!」

渡はポリポリと頭をかいた。

「んじゃ、何？ そのビニール袋には塩が……」

「まあまあ、最後まで聞けって。ただのサラサラの塩じゃ効果が薄いし、たかだか塩化ナトリウムだ。どこか科学的で対抗できるのか不安だ。そこで俺はひらめいた。もつと野性的で攻撃力のあるものを…… それは」

「それは？」

「それは？」

「それは？」

修はビニール袋から勢いよく何かの塊を取り出した。

「が・ん・え・ん…… 岩塩だ!!」

なぜか修は嬉しそうに笑っていた。自分の考えがよほど気に入っ

ていたのだろう。いかにも修らしい考えに三人は呆れながらもどこか納得した。

「なあ？ 見てくれよこの痛そうな感じ！！ サラサラの塩じゃ倒せねえ相手もこれなら確定だろ？ ニヒヒヒッ」

渡は修に突っ込むことなく知哉に話をふった。

「知ちゃんは？」

「……………」

「なに黙ってんの？ ……………… あっ！！ もしかして」

「ギクツ！！」

知哉は勘付かれたことに対してはつきりと口でギクツと言った。

「バケツの中身は塩！？」

「い、いやー 塩じゃないんだけど…………… その……………」

修はすぐに閉じてしまっビニール袋を重に押さえてもらいながら岩塩をしまっていた。

「塩じゃねえーなら何なんだ？」

「ま、まあ話を聞けよ…………… この世の物の全てには弱点とか苦手なものがある。ナメクジに塩、悪魔に聖水、水タイプに電気攻撃、猫型ロボットにネズミ、アンパン男に放水……………」

「ったく」

修は何かに気付いた。先ほど知哉がビクツとなった理由がわかったからだ。

「知哉、バケツの中身ニンニクだろ？」

「ドキッ!」

知哉は修の言葉にはつきりと口でドキッと言った。

「なんで、わかったんだ…」

「よほどの馬鹿じゃねえいかぎりわかるわ。つーか、元人間相手になんでニンニクよ？」

「なんか、ドラキュラのことしか思い出せなくてさ… けど十字架も銀製品も簡単には用意できないからよ… しかたなくニンニクにしたんだよ」

今の話を聞いていた重には一つの疑問があった。ニンニクを使うにしたって、ニンニクを手で投げればいいはず、ではなぜ知哉は柄杓を持っているのか、という疑問である。

「ねえ知ちゃん？ じゃなんで柄杓をもってるの？」

「へっ？」

修は知哉の反応を見てあることに気が付いた。

「お前、ニンニクすりおろしたのか？」

「……………なあ大先生、その紙袋の中は何？」

「はぐらかすんじゃないかねえ！！　なんですりおろすんだよ！？」

「何となくそつちのほうが良いかと思っただよ！！」

「仮にそれを使って元人間を倒せたとして、掃除が面倒くさいだろ！！」

「い、いいじゃねえか別に！！　ああ大先生、紙袋の中は何なの？」

ガミガミ言われるのが面倒くさかった知哉は無理やり重に話をふった。話をふられた重はニヤリと笑い、紙袋の中身に手を伸ばした。

「これはかなり効くと思うよ？」

重は小さなラッパと太鼓、そして太鼓を叩くためのバチを取り出した。ラッパと太鼓はどこぞの均一ショップで買えるようなものだった。黄色、ピンク色、緑色で塗られたその二つの楽器は『子供に使ってもらいたかった』というオーラを出していた。知哉へのガミガミを続けていた修だったが、その楽器を見て頭をポリポリかきだした。

「いや……………　何かもう、突っ込みどころが多くて困るんだけどよ」

「うん」

「まず、何でバチだけそんなに本格的なの？」

バチはかなり使い古された感じのもので、大太鼓を叩くときに使用する時のものだった。

「あつこれ？ これはさ、太鼓に付属していたバチを使ってたんだけど、練習するうちに壊れちゃって… だから代わりのバチを用意したんだ」

「わりい、質問がもう一つ増えたんだけどよ、練習って何の練習？」

「元人間を成仏させてあげられるリズムの練習。今からちょっとだけやって見せるから……」

重はラッパを口にくわえ、右手にバチを持った。太鼓は地面に置かれ位置の修正が行われた。準備が終わると重はバチを縦に三回ほど軽く振りリズムをとった。

タンツ プー タンツ プー タンツ プッピー タンツ！！
タンツ プー タンツ プー タンツ プッピー タンツ！！

「……………で？ 教授はどんなの考えてきたの？」

「ちよつと！！ 俺への感想は！？」

「ねえよ！！ てか何て言えばいいんだよ！？ プッピーの部分が官能的だったとか言えばいいのかよ！？」

「おっ！ 俺もそう思ったぜ修！」

知哉の感性が未だにわからない修は黙っていた。すると重が口を開いた。

「知ちゃん…… バツカじゃねーの？」

「はあ！？ 褒めたんだろうがよー!!」

「はいはい、んで教授は？」

修は重の感性に安心を覚えると、教授のほづをジロジロと見た。

「あれ？ 何にも持ってないじゃん」

「ふっふっふっふ」

不気味に笑う渡。

「なぜか知りたいかい？」

「いや別に、よし知哉、大先生、中に入ろうぜ？」

「ちょ、ちょっと!! 聞きなさいよ!!」

知哉が面倒くさそうな顔をする。

「知ちゃんのすりおろしニンニクよりマシだよ!!」

「ほんとに？ なら聞いてもいいけど」

渡は外国人のようにジェスチャーをたくさん入れながら話し出し

た。

「俺が調べてきた方法は道具なんか使わないんだ。この体だけで人間を浄化させることができるんだ」

「いったん、紙袋に楽器をしまっていた重が興味深そうに顔を上げた。」

「そんなことが可能なの？」

「可能も可能」

「どつやってやるの？」

「舞だよ舞い」

知哉は思いついたような顔をした。

「わかった！！ インディカ米だろ、インディカ米！！」

ピシッ！！

「いってええええ！！」

修の驚愕のデコピンが知哉を襲った。

「何すんだ！！」

「何すんだじゃねえよ！ 今どきの小学生でも、んなくだらねえこ
と言わねえよ！」

「ああ、でも知ちゃん惜しいな！ 正解はインディール舞なんだよ」

「ほれ見ろ！！ 惜しかったじゃねえか！！」

ピシッ！！

「いってえええー！！」

修の常軌を逸したデコピンが知哉に放たれた。

「何が惜しいんだよ！！ お前のマイは米のマイだろ！！ 渡が言
つてんのは踊りのほうの舞なんだよ！！」

修はくるりと渡のほうを向いた。

「で、どんな踊りなんだ？」

「ん？ 太古の舞らしいんだけど… じゃちょっとやって見せるわ」

渡は姿勢を正した。そして両手を目の高さまで上げてピタッと止めた。横だった手のひらを縦にしてそのまま腕を顔のほうに90度曲げた。そして息を吸い込んだ。

「1・2・3ハイッ！！」

「ちょ、ちょっと待てよ教授。あ、あのよ…… 止めようとしてんに踊ろうとすんじゃないねえ！！」

渡はようやく踊るのを止めた。

「まったく、それで……　そうそう、最初のポーズは何だったんだよ！？　あれも舞の一つか？」

「あれは俺のリズムの取り方だよ」

「小学生のときからの付き合いだが、あんなリズムの取り方初めて見たぞ？」

「最近の俺の中での流行りなんだよ！！　いいから躍らせなさいよ！！」

渡はまた姿勢を正した。そして両手を目の高さまで上げてピタッと止めた。横だった手のひらを縦にしてそのまま腕を顔のほうに90度曲げた。そして息を吸い込んだ。

「1・2・3ハイッ！！　モースモースミンミン、ケールマーニモンペ！！　モースーモース……」

渡はその場でもも上げダッシュのような感じで足踏みをした。両腕は阿波踊りをよく知らない人間が阿波踊りをした時のような動きをしていた。

「なあ知哉、今さモンペって言ったよな？」

「あ？　マジかよ？　聞き逃したわー」

「モースモースミンミン、ケールマーニモンペ！！　モースモース……」

「あつ本当だ、モンペって言った!」

「だろ? 言つたよな大先生?」

「モースモースミンミンミン、ケールマーニモンペ!! モースモースミンミン、ケールマーニモンペ!! ケールマーニ、モ・ン・ペ!!!」

「モンペで終わんのかよ!!!」

「たまらず修は突っ込んだ。渡は息を荒くし、両太ももを抑えていた。」

「ハアハア… こ、これで… 一撃だよ… ハアハア…」

「足にきちちゃってんじゃねえーか! もう一回踊れんのかよ?」

「お… ハアハア… 踊れるよ…」

「なんか不安になってきたな」

重は工場を見ながらつぶやいた。

「まあ、なんとかなるんじゃない? いざとなつたら柄杓でぶつ叩くしかねえーけど」

重はバチを、知哉は柄杓を軽く振りながら工場を見つめた。

「落ち着いたか渡?」

「うん、落ち着いた…」

「よし…… それじゃ、そろそろ行くとするか……」

修の言葉に三人は静かにうなずく。緊張感が高まっていく。修は渡にビニール袋を一度持つてもらい、工場の左側にあるドアのカギを開けた。そして入ってすぐに工場内の明りをつけた。渡からビニール袋を受け取った修は、工場内へと振り返る。どこまでも続いているような暗闇は明りによって消され、ガラクタと少しの雑貨しか置かれていない工場が姿を現した。

シーン……

無音という音が工場内に響いていた。

第一話 廃工場の謎 その8

「ふう… なあ？」

修は二階へ続く階段前で立ち止まった。昨日のことがまだ頭に残っているのだろう。

「ちゃちゃっと上ったほうがいいよな？」

三人の意見を待たずに修は階段を上り始めた。カンカンツと階段が足に踏まれて出す音が工場内に響く。修が二階に着いた時にはその音が三重になって聞こえた。

「第一関門クリアって感じかい？」

「なんか第一関門が階段つてレベル低くないか？」

修と知哉の話を聞きながら、渡は問題の部屋へと続く、手前の部屋のドアノブをじっと見つめていた。

「よし、それじゃ第二関門だ。渡、ドア開けてくれ」

「やだよ！ 修が開けなさいよ！ 先頭をきるって約束したろ？」

「わかったよ、やるよ。おい、準備はいいか？」

三人は頷く。

ガチャリ…………… ギギギ……………

なんてことはないただのドアが開く音。しかし、四人にとっては不気味な音にしか聞こえなかった。修はドアを開けた瞬間に左の壁にある明りのスイッチを押した。

「よ、よし…… 入るぞ？」

修に続き三人もその部屋に足を踏み入れた。ここの部屋に入るのは初めてではない。三週間前に片付けをしているときに何度か入った。そのため部屋の中は綺麗で少しの物しか置かれていなかった。

「第二関門クリアだ」

「修、クリアしたのはいいんだけど、問題の奥の部屋にどうやっていくつもりなの？」

「そう先を急ぐなよ大先生。部屋は奥にあるんだ。だからこの部屋の奥の壁を調べりゃいいんだよ」

修はビニール袋を床に置いた。そして何も持っていない渡に頼み、二人で壁をノックして音を調べた。

「音が違う場所があればそこにドアがあるはずだ……」

二人は壁の両端から中央に向けて壁をノックしていった。二人は丁寧に壁をノックしていったが音は相変わらずだった。

「おかしいな…… どこも同じ音だな」

「そうだね……」

二人は中央までノックし続けたが同じ音しか聞こえなかった。修は後ろでノック音を聞いていた重と知哉の顔を見た。

「音、一緒だったよな？」

「ああ、一緒だった」

知哉は返事をしたが重は黙って壁の上のほうを見ていた。

「おい、大先生！ 聞こえてんのかよ！？」

「……………」

「おい！！ シゲ！！ 聞こえてんのかよ！？」

「えっ！？ ああ聞こえてる聞こえてる！ 俺は冷やしたぬき蕎麦のほうが好き」

「何の話してんだよ！！ 音に変化がなかったよな？ って聞いてんだよ！」

「ああ… なかったなかった」

「ったく… つーかさつきから何を見てんだよ？」

重は壁の中央上部を指差した。

「ほらあそこ、壁から何か太い針金みたいなものが出てるでしょ？」

重の言つとおり、壁から太い針金が出ていた。その針金はU字の形をしていた。渡はそのU字の針金を真下から覗いてみた。

「何だろうねコレ？」

「あ、そつだ。ちよつと待ってるよ？」

修はそういうと部屋を出て一階へと向かった。残された三人はただじつとその針金を見つめていた。2、3分だろつか、部屋の外からカンカンツと階段を上る音が聞こえてきた。

「おう、これ使ってみるよ？ 下のガラクタの中にあつたやつ」

修はシャッターを下ろす時に使う棒を持ってきた。修は一番背の高い知哉にそれを渡した。

「ん？ これで何すんだよ？」

「引つ掛けて引つ張れ」

「引つ張るのか？」

「そつだよ、引つ張ってくださいって形してるじゃねえか」

知哉は言われるままにU字の針金に棒の先を引つ掛けた。引つ掛けたまま知哉は壁から距離を置き、引つ張る体勢をとる。

「んじゃ引つ張るぞ？」

「おう」

修の『おう』と同時に知哉は棒を引つ張った。

「おりゃっー！」

ギギギ…………… グツ…………… ドウガン……………

壁はホコリを立てながら手前に倒れた。壁紙、もしくは壁の一部が取れると思っていた四人は啞然としていた。

「ちよつと、ゴホゴホツ……………」

ホコリが落ちて着いてきた時、倒れた壁の向こう側が姿を現した。クモの巣やカビで汚れた壁、その壁の中央にはなにで汚れているのかもわからない汚いドアがあった。

「い、いかにもだな……………」

「修、いかにもだな…………… じゃないよ…………… 相当ヤバい感じがするけど……………」

渡はゆっくりとドアに近づいた。優しくドアを撫でた渡は身震いをした。

「うへ…………… ザラザラしてて気味が悪い……………」

知哉は壁に近づき柄杓でパコパコと壁を叩いてみる。叩くたびに壁の表面についた汚れが柄杓にこびりつく。知哉は柄杓についた汚れを見ながら壁から離れた。

「修、マジで部屋に入んのか？ ヤバそうだぞ？」

「ここまで来て後には退けねえーだろ…… 準備はいいか？」

修はビニール袋をしっかりと持ち、ドアの前に立った。準備が整ってようやくがまいが、といった感じで三人も修の後ろにスタンバイする。すると渡が深呼吸を始めた。それにあわせて残りの三人も深呼吸をする。

「よ、よし、行くぞ……」

グウアチャリ…… ギー……

鈍い音をさせながらドアは開いた。修はまた左側にあるであろう部屋の明りのスイッチを探した。手探りでスイッチを探し当てた修だが部屋は暗いままだった。

「おい、修…… 早く電気をつけなさいよ」

「うう…… 教授…… スイッチを押しても電気つかない……」

「電球が切れてるのかな…… ずっと使われてなかった部屋なんだし

……」

「これ使ってよ……」

重は紙袋の中から映画やドラマでよく見る大型の長いLEDライトを取り出した。

「これ、数千円するマークライト社のじゃねえか!？」

「感心してないで、早くスイッチ入れなさいよ!!」

「わかったわかった!」

修はヘッド部分を回しライトをつけた。LEDの青白い光が部屋内部を照らしだす。

「うっ… きたねえ…」

部屋中にゴミが散乱しており、悪臭が漂う。一歩ずつゆっくりと四人は部屋の中へと進んでいく。一歩踏み出すたびに四人は身震いをしていった。部屋の温度が異様に低いのである。

「気味悪いな… ひゃっ!」

知哉の小さな驚きの声に三人は尋常ではないくらいのビクンッをしました。

「な、何よ知ちゃん!?!」

「わ、わりい、今そのテーブルのところで何か動いた気がしてさ…」

修がゆっくりとLEDライトをテーブルに向けた。

「うっ…!」

「うっ…!」

「ひいひい…!」

「くうう…!」

テーブルの上にはコンビ二弁当の空き箱が置いてあった。その弁当箱はカビていて小さな虫たちがたかっていた。しかし、その小さな虫に対して四人は声を出したのではない。

「な、何だあれ…」

虫好きな修ですら見たことのない、ヘンテコ虫がそこにはいた。胴体の大きさはコガネムシでシマウマのような白黒のストライプ、目はオニヤンマぐらいあり、熟れたキイチゴのようになっていた。羽はむき出しでトンボと同じように透明な羽だがアゲハチョウぐらいの大きさだった。

「いいか？ 変に刺激を与えるなよ？ あんなのがお前： 飛んだりしたら…」

ブウウウーン

そのヘンテコ虫は修たちの目の高さまでホバリングした。

ブイイイーン！！！！

そのヘンテコ虫は修たちめがけて飛んできた。

「ぬわあああー！！！！」

「ぬわあああー！！！！」

「ぬわあああー！！！！」

「ぬわあああー！！！！」

パニック発動である。虫嫌いの知哉は柄杓を手から放し、修からLEDライトを奪い取りパニックに身を任せ振り回し続けた。

「ひー！！ 来るな！！ 来るな！！」

「バカ！！ 振り回すんじゃねえ！！ ふがつー！！」

LEDライトが修の芯を食った。暴れ続ける知哉を重と渡の二人が必死に抑える。

「知ちゃん！！ ちょっとー！！」

「もうヘンテコ虫いないから、落ち着いてー！！」

「ひー！！ 来るな！！ 来るな！！」

「このバカ！！ 落ち着けてのー！！」

野球ボールならセンター前まで飛んでいた修が加わり、ようやく知哉はパニックから抜け出した。

「ハアハア… ったく、落ち着いたのかよ？」

「わりい… やっぱ虫はダメだ？」

なぜか知哉の口調は尻上がりになった。知哉はLEDライトで部屋の奥を照らしたまま動かなくなった。三人は嫌な予感がしながらも知哉の見つめるほうに視線を移した。

「んぐっ…」

修はよくわからない声を漏らした。それは無理もないことだった。

LEDライトの先には背を向けた黒い人影があったのだ。四人は金縛りにあったように動かなくなった。

「……………」

黒い人影はその場でクネクネと動き出した。すると人影はその体勢のままスウーとこちらに移動してきた。内海さんの言う「むーんうおーく」である。

スウー スウー スウー スウー…

どんどん近づいてくる人影。しかし、恐怖のあまり四人は動けないでいる。

スウー スウー スウー ピタツ…

人影は知哉の持つLEDライトの手前で止まった。そのときようやく人影から影の部分が消え、はっきりと見ることができた。その「人」はくると回転し、四人に正面を向けた。だが、うつむいているために顔は確認できない。

スッ…

ゆっくりと顔を上げる「人」。高まる四人の恐怖と緊張。それを楽しむかのように急に「人」は顔を上げた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

恐るべき『人』の顔。真っ白な顔に異様に赤くなつた唇、目の周りにはおかしい模様が浮き出ており、恨めしそうな表情で四人を見つめる。

ニヤッ…

笑う『人』。おののく四人。

ブイイイーン……

笑い続ける『人』。おののき続ける四人。LEDライトに止まつたヘンテコ虫。

「ぎゃ————！！！」

「ぎゃ————！！！」

「ぎゃ————！！！」

「ぎゃ————！！！」

真・パニック発動である。知哉はLEDライトをヘンテコ虫ごと『人』に投げつける。

「のわっ！！！」

LEDライトは『人』の顔面に命中し、『人』はうずくまる。

「このっ！！ このっ！！！」

修は全力でガシガシと岩塩を投げつける。

「このやる！！ このやる！！」

知哉は全力ですりおろしニンニクをバシャバシャと浴びせる。

タンツ プー タンツ プー タンツ プップー タンツ！！

重は全力でラツパと太鼓を奏で続ける。

モースモースミンミン、ケールマーニモンペ！！

渡は全力でインディール舞を舞い続ける。

「ちょっと、やめて… 痛い痛い！！ ぎゃー目にニンニクがあ！！」

許しを請う『人』の声など四人には聞こえなかった。四人はさらに白熱する。

ガシガシガシガシガシガシガシッ！！

バシャバシャバシャバシャバシャバシャ！！

タンツ プー タンツ プー タンツ プップー タンツ！！

モースモースミンミン、ケールマーニモンペ！！

「俺が悪かったから、もうやめてくれ！！！！」

ガシガシガシガシガシガシガシッ！！

ガシガシガシガシガシガシガシッ！！

第一話 廃工場の謎 その9 (第一話終)

「うーん……」

雀の可愛らしいさえずりで『人』は目を覚ました。先ほどの騒動から数時間が立っていることに、すぐには気が付けずにいた。事務所外でタバコを吸っていた修と知哉は『人』が目を覚ましたことに気が付いた。

「おい、修」

「ああ、起きたみたいだな」

地面に置いてある灰皿でタバコを消すと、知哉は工場のほうへ渡と重を呼びに、修は事務所の中に入っていった。

「あの… 大丈夫ですか？」

「あ、ええ… まあ…」

『人』は寝ていたソファーにゆっくりと座りなおした。修は買っておいたペットボトルのお茶を『人』に渡し、向かいのソファーへと座った。二人の間に沈黙が流れる。

「目、覚ましたって!？」

重が慌てて事務所内に入ってきた。それに続けて渡と知哉も事務所に入ってくる。渡は入り口付近の壁にもたれ、知哉は事務イスに腰をかけ、重は修の横に座った。修はそれを見届けてから口を開く。

「あの… まず、その… お名前を聞いても？」

「あ、はい… 椎名源二といいます…」

「椎名さんですか… あ、どうも… えっとあの、何か昨日はすみませんでした」

修のすみませんでした、に合わせて他の三人は姿勢を正し頭を下げた。

「あの、てっきり幽霊かと思ってしまつて…」

「ああ、いえこちらこそすみませんでした！！ 勝手に工場に入り込んでしまつて」

重は謝りあつていても話が先に進まないと思ひ質問をした。

「あの聞きたいことがいくつもあるので、最初から説明してもらつてもいいですか？」

「あ、はい…」

椎名はソファーに座りなおした。

「えーっと… 何から話せばいいか… えー、名前は先ほど言いましたが椎名源二といいます。34才です。ああええと、昔はレッドスクウェア社で営業マンとして働いていました…」

社名を聞いて渡が驚いた。

「レッドスクウェア社！？ 自然エネルギー関係のトップ企業じゃないですか！？」

「あ、はい…… ある程度の地位にはついたのでありますが、子供のころからの夢を諦められずにいまして、思い切ってやめたんです」

「かぁー、もったいない！！」

知哉の意見には他の三人もうなずく。就職できずに何でも屋を開業するのだから当然のことである。顔のメイクで大体の予想はついていたが、渡は一流企業をやめてまで叶えたい椎名の夢が気になった。

「それで、その夢って何なんですか？」

「パントマイムです」

「ああ、やつぱり……」

「子供の頃は勉強ばかりしていて周りの友達が羨ましかったです。夏休みといえばプールに行ったり虫を追いかけたり、家族と一緒に海や山に行つて楽しく遊んだり…… ですが私の夏休みは勉強勉強の毎日。朝早くから夜遅くまで塾に缶詰でした」

「俺だつたら逆に頭がバカになつちまうな」

修は冷えた緑茶をすする。

「正直、私もそんな毎日がつらくてつらくて…… そんなある日、塾

が早く終わっただんです。ただ、早く終わっても勉強以外にやることがないので嬉しくはありませんでした。ただ帰り道にあるものを見ただんです」

「パントマイムですか？」

修の問いに椎名は静かにうなずいた。

「暑い日差しの中、駅前の広場で多くの人たちを笑いに包んでいました。楽しい衣装に面白いメイクをほどこし、汗だくになりながらただひたすらに人々に笑いを届けていたんです。ある時は何個ものボールを使ってジャグリングして驚かせ、何メートルもある一輪車を取りこなし、見えないロープを引っ張り、見えない壁をつたい……」

椎名は記憶の中で鮮明に残るその思い出を、まるで今その目で見ているかのように語る。

「父も母も親戚も俗にいうエリートでした。そのために一流企業の社員や公務員になれと小さな頃から言われてきました。実際に両親が働く会社や様々な省庁にも連れて行ってもらいました。ですがそこで働く人もそこを利用する人もみな笑顔ではなかった。『知識は自分のためになる』という父親の言葉も私には受け入れがたい言葉でした」

渡は同感しているようだった。

「俺の大学の教授が言ってました。知識とは生活そのものを豊かにするものでもなければ、幸せになるために使う物でもない、ましてやTVで難解な問題を解くためのものでもない。知識というものは人

と人との間、文化と文化の間に橋を架げるときに使うものだって」

「つまりは自分が幸せになるためじゃなく、誰かを幸せにするために使っつてことだろ？」

「そういうこと」

渡と修のやり取りに椎名はどこか親近感を覚えた。

「このまま、金と肩書のために働いていくのが嫌になり、会社を辞めてパントマイムをやることにしたんです」

「なるほど……」

四人は椎名の顔のメイクの意味が分かった。しかし、工場にいた理由をまだわかっていなかった。修は椎名に聞く。

「椎名さんのことはよくわかったんですけど、なんでまたウチの工場にいたんですか？　というかどうかやってあの部屋に入ったんですか？」

「部屋へは工場裏の屋上へ続く梯子を上り、途中の窓から入ったんです」

「へっ？　そんなものありました？」

「ええ、少しだけ錆びついている梯子が」

「知らなかったなあ……」

修は腕を組みながら言った。そんな修を他の三人は冷ややかな目で見ていた。何を見て修はこの工場に決めたのかという目だった。

「それで、この工場にいたわけはですね、お金がなかったんです。なので…」

「へっ？ 何でお金がないんですか？ 貯金とかされてなかったんですか？」

「貯金はしていたのですが色々と掛かりまして… それに不器用なんですよ私。ですから何か仕事をしながらパントマイムの練習をしていると両方ダメになってしまふんです。仕事でミスをしたり、練習をしても一向に上達しなかつたり… どちらか片方だけをしているときは自分でも信じられないぐらいに上手くいくんですけどね」

「なるほど、それでパントマイムばかり練習している間にお金が尽きてしまったんですか」

「はい。それで公園や河川敷を転々としたんですが、どこも馴染めずにいたんです。そんな時にこの工場を見つけたんです。今から4か月ぐらい前ぐらいからここに住むようになって…」

「そうだったんですか…」

一通りの話は終わった。五人の間に沈黙が流れる。『さて、これからどうするか？』という考えが沈黙を生み出していた。だが、徐々にではあつたが知哉、渡、重は考えが変わってきた。何か問題が起きたときには修が解決すると決めていたので、ここは修に任せればいいか、そんな考えでいた。もちろん、修もそのことには薄々だが気が付いていた。

一方、椎名の考えはこうだった。不法侵入をしていたのだから警察に連れて行かれても仕方がないだろう、そして警察のお世話になったあとはどうしていけばいいだろう、と想っていた。

「あの…… 椎名さん」

「あ、はい……」

「あの、こういうのはどうですかね？ 岩塩とニンニクの件と椎名さんが僕らにパニックを発動させた件は相殺つてことにしまして……」

「は、はい」

「椎名さんがまあ、その…… 不法侵入してしまったわけですが、警察に届けない代わりに何でも屋の一員となって働いてもらえないでしょうか？」

「えっ!？」

「いやー、こつちとしても元レッドスクウェア社の社員さんが働いていたけると助かるんですね。なんせ俺たちはバカばかりなもんで……」

「俺以外って言うってもらえる？」

渡は自らを指でさしながら修に近づく。

「教授は勉強のできる馬鹿なんだよ」

渡は妙に納得した。

「それとなく生活できるぐらいの収入は見込めますし、パントマイムを続けることもできますし、もしかしたらパントマイムの依頼が来るかもしれません…… どうです？」

考え込む椎名を見て修はさらに提案を出す。

「住む場所も心配しないでください。この事務所には小さいながらもキッチンがありますし冷蔵庫もあります。トイレもありますし二階には寝るスペースもあります。まあ、まだ片付いてはいないですが……」

修は何とかして椎名を何でも屋の一員にしたかった。レッドスクウェア社の元社員という理由もあったがそれは100パーセントのうちの10パーセントにも満たなかった。親の教育方針で人生を決められ、そこからようやく抜け出し新たな道を進んでいる椎名に頑張ってもらいたかったのだ。さらに住む場所も仕事もない人を追い出すことが修にはできなかったのである。

「……………そ、それじゃお言葉に甘えて」

「やっつけてくれますか!？」

「はい」

「よぉーし!!」

修は小さくガッツポーズをし、知哉は修に近づきハイタッチを求めた。それをみて渡と重もそのポーズをした。修は立ち上がり順々にハイタッチを済ますと、ニコニコしながら椎名にもハイタッチを

求めた。椎名は少し照れながらもハイタッチを返した。

「これからよろしく願います」

「いやいや、こちらこそ願いますよ椎名さん。あ、あと椎名さんのほうが年上なんですから俺たちに敬語を使わなくてもいいですよ?」

「いやいや、雇ってもらう身ですから…」

「年上の人に敬語使われると俺たちがやりにくいですよ」

「そ、そうかな?」

「そうですよ。それじゃもう昼飯時ですから何か食べに行きましょう」

「そうだな!」

修はその提案に乗った。

「じゃ、裏のおじさんも誘って行くこうぜ? 色々と迷惑かけちまっただんだから」

「おっいいね、んじゃ大宇宙にしようぜ?」

知哉がにこやかに提案し事務所を出ようとする。だが渡と修がそれを阻止した。

「なんだよ?」

重が知哉の正面に回る。

「知ちゃんはニンニクを掃除してからにしない!」

「ああ? 教授と大先生がやってくれたんじゃないの?」

「何で俺と大先生が片すんだよ!? 自分で片付けなさいよ!」

「一人でかよ!」

「当たり前だろ!! 俺だって岩塩を片付けたんだからよ」

「いや、だってすりおろしニンニクだぜ!? あんなの一人じゃ…」

「すりおろしたのは知ちゃんでしょうが!」

四人の言い合いが始まった。椎名はそれを楽しそうに見ている。こうして何でも屋は新たなメンバーを迎え、五人で開業することとなった。その日の夜も内海さんが「むーんうーく」をしている人物を見たことも知らずに。

第二話 よそでイチャつけ!! その1

『では、最後のニュースです。アジサイ園でカタツムリが大量発生したようです』

事務所の控室、その隅の上部に設置されたテレビは綺麗にカタツムリを映し出した。ソファーと事務イスに腰掛けていた知哉と椎名は顔を見合わせる。

「大量発生って、カタツムリでアジサイが見えてねえ……」

「うわぁ……カタツムリもあれだけ集まると気持ちがわるいね……」

「本当ですね……椎名さん、テレビ消してちゃって下さい」

「うん」

アナウンサーが別れを告げる前にテレビは消された。そのとき、事務所の受付のほうから引き戸が開く音がした。知哉は事務イスに座ったまま、キャスターを利用して受付のほうへ滑って行った。

「おっ、ご苦労さん」

「ああ、ただいま知ちゃん」

重は傘をたたみながら事務所に入ってきた。それに続いて修も傘をたたみながら事務所へと入ってくる。

「ふう……おっ知哉、代金の代わりに土産をもらったぞ」

「うん？ ああそうか、ケーキ屋の雑用の依頼だったけか？」

「おう、開店準備の手伝いだからな、代金は安くしてさらに出世払いにしてきた」

引き戸の前でもらったケーキの袋を修は知哉に長々と見せていた。

「ちょっと、早く入ってもらえる？」

「ん？ ああ、いたのかよ教授？」

別の依頼で外に出ていた渡が帰ってきていた。修や重の安いビール傘ではなく、渡は紺色の高級傘を丁寧にたたみ傘入れに差す。渡は傘をしまうと事務所の引き戸をゆっくりと閉めた。

「渡君、それでどうだったの家庭教師の依頼は？」

椎名が知哉の後ろから声をかけた。

「うーん、依頼した高校生の子は裕一君って言うんですけど、ちょっと気負いすぎですかね」

「確か渡君と同じ千葉新国際フレキシブル大学に入学希望なんだよね？」

「そうです。ただ裕一君もご両親ももう少し肩の力を抜いてもらわないと、あれじゃいくら勉強しても頭に入らないですよ」

「何か大変そうだね」

「まあ、最初は勉強よりも先に、肩の力の抜き方から教えていくつもりです」

渡と椎名が話をしているうちにローテーブルには先ほど修がもらってきたケーキと、知哉が丁寧に入れたアイスコーヒーが整列していた。

「依頼の話はそれくらいにして一息入れようぜ？」

「そうだね」

「知哉君がコーヒーを入れてくれたの？」

椎名は意外そうな顔をしながらコーヒーを見つめた。

「そうです。豆を挽いて熱湯で丁寧に入れたコーヒーを香りそのままアイスコーヒーにしたんですよ！」

話を聞きながら椎名はソファアームに座り、アイスコーヒーが入った薄い緑色のグラスを手を取った。そして、鼻を近づけゆっくりと香りを嗅いだ。

「本当だ、いい香りがする……」

「でしょ！？　　そうでしょ！？　　椎名さんは良い鼻してますねえ」

満足そうな知哉の顔を見て修は呆れ顔。そして修には不釣り合いな可愛らしいショートケーキを食べる。修自身、こういった食べ物不釣り合いだと知っているので外ではあまり食べないようにして

いる。

「椎名さん、あんまりこのバカを調子づかせないで下さいよ?」

「嫉妬するんじゃないよ修。素直に俺の才能を認めるよ」

顔がゆるみ続ける知哉に、自分で入れたアイスウーロン茶をすすっていた重が話を変えた。

「ハッピーウィークニュース見れなかったけど、何か面白いニュースあった?」

「うーん? 特に何もなかったけど… あ、そっぴやアジサイ園にカタツムリが大量発生してたぞ。すげー気持ち悪かった」

イチゴを食べていた修はピクツとなり、早く喋りたいがためにイチゴをアイスコーヒで流し込んだ。

「カタツムリが大量発生!? くっそー見たかったな…」

「カタツムリでアジサイが見えないぐらいだったぜ」

「のおお!! マジかよ!? 余計見たくなつたわー」

渡は近くにあった新聞を広げた。そして株価のページが出るまでめくった。

「ホント、修は虫とかそういうの好きだよな」

「大好きなんだよ! フォルムが渋いんだよ虫ってのは!」

「まあ、確かに洗練されてはいるよね」

「はあ…… 誰かハッピーウィークニュース録画してねえかな……」

「普通、ニュース番組は撮ってないでしょ？」

「……………!!」

修は渡の持つ新聞のテレビ欄を見てひらめいた。

「いや撮ってる人間が身近にいたわ!!」

「誰よ？」

「妹だよ！ あいつさ、K・POPのアイドルが出る番組は全部録画してんだよ」

「それとニュース番組と何が関係あるの？」

修は渡の新聞を奪い取り、テレビ欄の一つを指でさしながら渡に見せた。

「世界激甘スイーツ紀行？ 人気のパティシエ谷越……」

「あ？」

修は指す場所を間違ったことに気が付いた。

「違う違う、こっちこっちハッピーウィークニュースの欄だよ!!」

欄には『特集!! 最新K・POPアイドル』と書いてあった。

「あいつは30分の番組で好きなアイドルが5分ぐらいしか出なくても、まるまる30分しつかりと録画予約入れてんだよ」

重は二杯目のウーロン茶をすすりながら修の話聞いていた。

「へえー、美穂ちゃんK・POP好きなんだ?」

「ああ、毎日K・POPが家で流れてるよ… あんまり流れてるもんだから興味のない俺も覚えちゃったよ… この曲はこのグループで、何とかダンスしてとか、あの金髪は誰々でドラマにも出てるとか…」

「まあ、流行ってるんだからいいんじゃないの?」

「おう、ただよ、名前にチャとかチュとかジャとかヒョとか小さいヤユヨがいつぱい出てくるからたまにゴツチャになるんだよ…」

「ああそう言われればそうだね」

「まあ韓国の人からしてみりゃ、太郎だの一郎だの、慎也だの知哉だの、卓だの重だの渡だの…」

「修だの消しゴムだの…」

それを言った瞬間、知哉は修に弾き飛ばされた。

「グエツ!」

「遼平だの庄平だのわかりにくい名前なのかもな？」

修が話し終えた一瞬の沈黙の間に、事務所内に置かれた大きな時計は三時を告げた。古めかしい鐘の音が事務所内に響く。知哉がまたか、という顔をした。

「…… 教授、やっぱり持つて帰れよあのデカイ時計」

「何ですよ？ 年代ものなんだよ？」

「この事務所にはサイズも鐘の音もデカすぎるんだよ？」

「お前が言っな」

それを言った瞬間、今度は修が知哉に弾き飛ばされた。

「グオツ！」

「せめて音だけでも小さくなりゃいいんだけどさ……」

相変わらずのやり取りを見て笑っていた椎名だったが何かを思い出したようだ。

「あっ、幼稚園に行く予定だったんだ！！」

幼稚園のフレーズで重もそのことを思い出した。

「そうですねよ椎名さん！ 今度パントマイムを見せに行くときの打ち合わせですよ、打ち合わせ！！」

椎名は大慌てで控室に戻り、驚異的なスピードで支度を済ませた。

「それじゃ皆、ちよっといつてきます!!」

椎名は傘を手に事務所を駆け足で後にした。そんな椎名を見て修はある疑問を抱いた。

「打ち合わせなのになんでメイクしていったんだ？ しかも笑ってるメイクで」

「そうだね、万が一遅刻した時は最悪だよね、心で謝っても顔は笑ってるんだから…」

重は自分で上手いことを言っていたと思っていた。

「それに、あんなメイクしてスーツ着て全力疾走したら、俺じゃなくても岩塩を投げられるぞ？」

そう言いながら事務所の外へ傘をさして出た修は、椎名の後姿を見ながらタバコに火をつけた。知哉も後に続いて出てきた。

「何か見た目によらず面白い人だよな」

「ああ、それに熱心でいい人だ」

二人はタバコの煙をくゆらせながら話していた。そして、椎名が和菓子屋を曲がったとき、二人の後ろから声が聞こえた。

「あ、あの… 何でも屋ってここですか？」

第二話 よそでイチャつけ!! その2

その声を聞いた二人の頭には、その声の持ち主のイメージが浮かんだ。自分たちよりも少し若くて体型はやせ形、さらにおとなしい性格だろう。そんなイメージだった。二人はそれを確かめるように振り返った。

「あ、どうもすみません…」

二人のイメージ通りの青年が深緑の傘をさして立っていた。修は『おっ当たった』の言葉を飲み込み、青年の質問に答える。

「ええ、ここが何でも屋です。もしかして依頼ですか？」

「は、はい」

「そうですか、それじゃ中へどうぞ」

修と知哉は大慌てでタバコを地面の灰皿で消した。

「知哉は依頼人を頼む。おい大先生! ここちやちやつと片してくれ! 教授は依頼確認の紙と… あのーあれだ… 用紙を持ってきてくれ!」

修は事務所に入るなりすぐに指示をした。そして依頼人の青年に「コーヒーかお茶かを聞き、控室にアイスコーヒーを取りに行った。その間、知哉は青年をソファアへと案内する。」

「すぐ準備できるので、すこしお待ちになっていてください」

青年は自分よりも20センチは大きい知哉に敬語を使われて変に緊張していた。青年がソファアに座ると同時に重はコースターをガラスのローテーブルに置き、それにあわせて修がアイスコーヒの入ったグラスを置いた。

「どうぞ」

「あ、どうもすみません。いただきます」

青年は一口アイスコーヒを飲んだ。

「お待たせいたしました」

渡が大きな黒いファイルと用紙を持ち、向かいのソファアに腰を下ろした。重と知哉は事務イスに座り、修は立ったままだった。

「えーと、それではまずですね… お名前と住所、それと職業をこれに書いていただけますか？」

青年は用紙とともに出された油性ボールペンを手に取り、ゆっくりと丁寧に書き込んでいた。すべての項目を書き終えた青年は、くるつと用紙の向きを変えて渡に手渡した。

「ありがとうございます。それでは… えー、すぎたみのる杉田実さん、20才で大学生… 学生さんなんですか？」

「あ、はい。千葉新国際フレキシブル大学に通ってます」

大学名に知哉はビクンツと反応した。

「チン〇フ… のわっ!!」

言い終わる前に知哉は渡に吹き飛ばされた。渡は咳払いをしてから席に座りなおした。

「き、奇遇だね… 俺も千葉新国際フレキシブル大学だったんだよ！ もう卒業したけど」

「えっ!! そうなんですか!! ということは僕の先輩なんですね!!」

「そういうこと、いやー、何となくそうなんじゃないかと思ってたよ。知性があふれてたもん」

「いえいえ、先輩のほうこそ、知性があふれてますよ!」

「そ、そうかな」

楽しそうに話を続ける二人を暇そうに修は見ている。

「先輩、お名前は…」

「ああ、そうだった。僕は犬塚渡、床でひっくり返ってるのが知哉、それを見ながらウーロン茶すすってるのが重、んで俺たちを暇そうに見ている髭が修」

「ちよ、なんか、もうちょっとマシな紹介できねえのか?」

渡はあっさりと修を無視し杉田との話を続けた。

「何か賑々しい感じでいい職場ですね」

「そ、そうかな」

「それに仲がいいんですね」

「ま、まあね。金欄の契というか… 腐れ縁というか… ま、親友には変わらないよ」

修は少しニヤけながらアイスコーヒーを飲んだ。重は気づく。

「何ニヤついてんの、修？」

「べ、別になんでもねえよ… ツーか、いつまでひっくり返ってんだ知哉！」

知哉はその言葉に目をさまし、ネックスプリングで跳ね起き、そのまま杉田の横に座った。

「それでだ、杉田君！ 依頼はどんなものなんだい？」

「え、えーとですね… デ、デートコースを決めてもらいたいです」

「デートコース？」

「はい」

「デートコースなんか自分で決めればいいじゃんか？ ウチの渡と

同じで頭いいんだろ？ なんつつたつてチン… ホプシツ！！」

知哉は謎の言葉を発しながら渡に吹き飛ばされ、また床にひっくり返った。

「……………ごめんね。えーつとそれで、デートコースを決めてもらいたいと？」

「はい」

「んー、どこに行こうか迷ってるのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんです。実は僕、留学で千葉新国際フレキシブル大学に来ているんです」

重は少し驚き、杉田に慌てて質問する。

「えっ？ 日本人じゃないの？」

「一応は日本人です。父も母も日本人なので。ただアメリカ生まれのアメリカ育ちなので、国籍からいうとアメリカ人なんです」

「ああ、そういうことか…！ なるほど、日本でデートしたくてもデートスポットを知らないから…」

「デートコースを決めてほしいと？」

渡が後に続いて杉田に聞いた。

「はい、そういうわけなんです…」

「でも…」

黙っていた修が口を開いた。

「彼女に聞いたり、雑誌で調べたりすればいいんじゃないの？」

「いやー、彼女も…」

「あー、そうかそうか、彼女も海外から来ててわかんないのか」

「ええ、そんな感じでして… あと雑誌で良さそうなところを見つけても方向音痴なもんで…」

「なるほどな、いろいろと面倒があるからここに頼みに来たのか」

「はい」

渡は杉田と修のやり取りを聞いて一つの疑問を抱いた。

「ねえ杉田君？ 方向音痴なのによくここまでたどり着けたね？」

「いや、駅前でも右往左往していたら色黒のナントカ協会っていう人に…」

「世界ダンディー協会？」

修は呆れながらも素早く杉田に聞いた。

「ああ！！ そうですそうです！！ 世界ダンディー協会です。そ

の人に近くまで案内してもらって来たんです」

「ああ、あの修を捕まえてくれた人？」

「そう…」

チヨボチヨボチヨボチヨボツ

重のウーロン茶を注ぎ足す音が響く。自前のマイグラスでウーロン茶をすすり続ける重は渡の隣に移動した。

「それで？ 修に渡、依頼受けてあげるの？」

「ん？ ああそうか、俺はいいよ。渡の後輩だし、青春を謳歌してもらいたいしな」

「あつ、じゃいいの？ 杉田君の依頼を受けても」

「いいよ。あ、担当は渡がやれよ？」

「もちろん！ えっとそれじゃ、杉田君の依頼は当店で解決いたします」

「本当ですか！？ ありがとうございます！！」

その声に知哉は目をさましネックスプリングで跳ね起きようとしたが跳ねが足らず、自らを床に叩きつけ、またしてもひっくり返った。

「このバカは何がしたいんだか……………」

第二話 よそでイチャつけ!! その3

渡は咳払いをして話を変えるきっかけを作った。

「それじゃ… デートコースを決めるから杉田君の彼女について、いくつか聞きたいんだけど、いいかな？」

「はい、答えられる範囲なら何でも」

「それじゃ、まず… どんな性格なのかな？」

「性格はですね、活発な感じですよ」

「活発ね… 元気な子っていうイメージかな？」

「そうですね」

渡は綺麗な字で聞いたことをメモしていく。

「次に好きなものは何かな？ スポーツとか音楽とかいろいろあると思うんだけど…」

「うーん… そうですね、スポーツは全般的に好きですね。サッカーが特に好きで」

「へえー、サッカーか…」

話を聞きながら修はいろいろと考える。しかし、大した考えが浮かんでこないのので考えるのを止め、話を聞くことに集中した。渡は

ちらつと修を見たがそのまま杉田に質問を続けた。

「じゃ、スポーツができるような場所が入ってるといいのかな？」

「そうですね、そうして頂けたら嬉しいです」

「好きな食べ物なんかは？」

「そうですね… リーナは…」

「リーナっていうのは…」

「あっ、彼女の名前です。えっとそれで好きな食べ物はですね、魚とかよりも肉のほうが好きですね… あっ…！」

杉田の急な大声に渡はビクツとしてしまい、慌てて少し髪をいじり平静を装った。

「ど、どうしたの杉田君？」

「すみません！！ 比較経済体制論があつたの忘れてました！！ 急いで大学にいかないと！！」

「えっ！？ じゃ、じゃあ急がないと！！」

修は急いで控室に向かうと壁に掛けてあつた車のキーを手にした。そして一口だけアイスコーヒーを飲むと控室を出た。

「杉田君、俺が送ってってやるから」

「え！？ いいんですか？ ありがとうございます！！」

引き戸を軽快に開けて外に出る修の後を杉田が続いた。修は軽トラに乗り込むと、散らかっていた助手席を軽く片し、内側から助手席のドアを開けた。

「ほい、乗って！」

「はい、失礼します！」

キュルルルッ… ドウグバゴォーン！！

軽トラとは思えない音が響いた。

「…………… まーた修理出さなきゃだめだ… あ、杉田君準備いいかい？」

「はい、大丈夫です」

「ちよつと杉田君！！」

今にも発進しそうな軽トラに渡が走り寄る。手を上下に振り、修にパワーウィンドウを下げるようにジェスチャーで表現する。

ウウーン…

「あ、ごめんごめん！ 杉田君、デートコースはいつまでに決めておけばいいのかな？」

「えーっと…………… 2週間後です！！」

「じゃあ、デートコースが決まり次第、連絡するよ！！ 修、連絡先聞いておいてね」

「おう、じゃちよっくら行ってくるわ」

「渡先輩、失礼します」

「うん、それじゃ気を付けて」

軽トラは走り出し、大通りの方へと消えていった。雨にうたれながら消えていく軽トラはどこか寂しげだなと、渡は思った。ただ何となく。

「で、どうすんだ？」

いつの間にか渡の後ろに知哉が立っていた。ズボンの両ポケットに手をつっこんで顔をしかめている。

「どうするって、決めるしかないでしょ？」

「女っ気の無い俺らでか？」

「あっちゃー、言われるまで忘れてたわ。彼女がいない俺たちで決められるかな……」

「ったく…… そういつとこ抜けてんだよなー、教授は」

二人して顔をしかめながら事務所へと戻る。それから数十分後、杉田を送り届けた修が帰ってきた。

「帰ったぜー」

「あつ、おかえり」

「おう、大先生…ん？二人はどこ行ったんだ？」

「コンビニにいったよ。雑誌買いに」

「ふーん、とりあえずは手に入る情報を集めようってわけだ」

「そういうこと」

修はソファーに寝そべり、それを見た重も向かいのソファーに寝そべる。二人して天井を見つめ考え込む。重は腕組みをしてブツブツ言いながら、修は火をつけてないタバコをくわえながら考えた。静かな空間に時計の時を刻む音だけが響く。

「はあー」

修はため息をつきながら上半身を起こし、軽く目をこすった。

「大体、彼女もない奴らだけでデートコースなんか決められるのか！？」

「それ知ちゃんも言ってた」

「だーもっつー！！」

修は立ち上がり、引き戸を開けて外に出てタバコに火をつけた。

「つーかいつまで雨降ってんだよ!? 頼むぜ…」

「明後日ぐらいまでは雨らしいよ」

重は上半身を起こし、背もたれの部分にアゴをのせ修の方を向いた。

「明後日まで? まじかよ」

修は煙を吐きながらその場にしゃがんだ。

「なあ大先生、あいつらどこのコンビニまで買いに行ったんだ? ちつと遅くねえか?」

「いや、すぐそのコンビニだけど、確かに遅いね」

「つたく、エロ本でもあさってんじゃねえのか?」

その時、煙を吐く修の後頭部に、丸めた雑誌の棒があたった。タバコの煙を吐く瞬間だったので修は驚いてむせてしまった。

「ゴホツゴホツ!」

「わりいわりい、タイミング間違えた」

知哉が謝りながら傘をたたんでいた。右手に雑誌を持っているため左手と腹を使って器用にたたんだ。

「わりいわりいじゃねえんだよ!! んで、雑誌買ってきたのかよ

「？」

修はタバコを消して立ち上がる。その修の顔の前に、知哉の後から来た渡がビニール袋を差し出した。ビニール袋から『特集』というピンク色の文字が透けて見える。

「一応、買ってきた」

「そうかよ、とりあえず会議だ会議」

会議とは依頼についての話し合いのことだ。どんな小さな依頼でも大きな依頼でも会議をすることになっている。一見、真面目そうな会議だが中身は文句の言い合い、罵倒の応酬の繰り返しだ。だが四人は子供の頃からこの方法でいろんなことを解決してきた。

「よし、じゃ始めようか」

渡がそう言いながら三人に視線を送る。三人は黙ってうなずく。

「で、どうしようか……」

「教授さー、この依頼の担当なんだからさー、小っちゃくてもいいから何か案を出してよ？　そうすれば何となくは話し合いができるからさー」

「わかったよ大先生。えーっとね……　杉田君のデートコースを決めるにあたって一番ネックになっているのは、俺たち四人に彼女がないということ。それで……　最近なんかは全くと言っていいほど女の子とのふれあいがない。女の子と遊びにも行かなければ話もしてない。つまりは今の女の子がどんなものが好きなのかわから

ない。これは致命的だ」

「確かに。俺も知哉も大先生もさっぱりだ」

「さらに彼女のリーナさんは日本人じゃないし……」

「んんー、あ、じゃあ……」

重がメガネを上げながら、渡よりも先に案を出した。

「あのー、あれじゃない？ やっぱり彼女じゃなくても、日本人じゃなくても、身内とか友達とかに聞いていくしかないんじゃない？」

「なーんだ大先生、案あるんじゃない」

「ん？ いやー、一番頭のいい教授が案を出したほうがいいかと思ってる」

重の案を聞いて知哉は身を乗り出した。

「大先生、俺もそう思う。とにかく今はどんな情報でも手に入れたいほうがいいぜ？ なぁ修？」

「そうだな……」

「修の妹は？ 美穂ちゃん美穂ちゃん」

「ん？ あいつはに聞いても無駄だ。人とは少し違った価値観を持つてるからよ…… 一体誰に似たんだか……」

「修以外の三人は『お前だよ』という言葉を飲み込んで話を進めた。それじゃ……」

「言っちゃってんじゃねーか！ 声に出しちゃってんだろーが！？ だったら教授のこの姉ちゃんはよ？」

「俺の姉貴？ ダメダメ！！ 今は仕事が忙しいからダメだよ！！ 今仕事の邪魔なんかしてみな？ 俺たちに使った時間分の金を請求されるよ！？」

「別にいいじゃんか、教授が払えば済むことだろ？ なあ！？」

修は残りの二人に賛同を求めた。当然、残った二人はその求めに応じた。

「よし、じゃあ一人目は教授のお姉ちゃんて決まりと」

「ちょっと待ってくれよ大先生……」

「諦めろって、かわいい後輩のためだろ？」

「そうはいつでもねえ知ちゃん……」

修は両腕を横に広げながらあくびをした。

「いいじゃんかよ教授、そのかわりに小中のときの同級生の連絡先は俺ら三人で調べておくからよ」

会議から二日後、まずは渡の姉、大塚麻衣おおつかまいに話を聞くこととなった。知哉と重はクラスメートだった女子の連絡先を調べていたので、

弟である渡と修が話を聞きに行った。

第二話 よそでイチャつけ！！ その4

「何時だっけ、待ち合わせの時間」

「もうそろそろ来ると思うよ？ 今、姉貴からメール来たから」

降っているのかいないのかわからないぐらいの細かな雨の中、駅前のロータリーで修と渡は麻衣の到着を待っていた。渡の姉の麻衣は自身で会社を経営する多忙の身。なので駅前から何でも屋近くの通りまでの車中で話を聞くこととなっていた。

「ん？ あっ、来たみたい」

「えっ？ どの車？」

「ほらあれあれ、白い色したコールスモイスだよ」

「コールスモイス！？ オーダーメイドの高級車じゃんか！！」

その白塗りのコールスモイスは、不釣り合いな駅前のロータリーを旋回しながら修達のもとへ優雅に近づき、華麗に停車してみせた。呆気にとられている修の前に運転手が大きな傘を手に降りてきた。

「渡様、お久しぶりでございます」

運転手は渡に丁寧なあいさつをする。

「篠塚^{しのづか}さん、お久しぶりです」

「これはこれは、修様ではございませんか。お久しぶりでございます」

「……………、ああ！！ 中学の時、渡の執事さんだった篠塚さん？ お久しぶりです！！」

「どうぞ、中へお入りください」

ガチャ…………

篠塚はゆつくりと後部のドアを開けた。その瞬間、優しい紅茶の香りが車内から漂ってきた。そしてその香りと共に甘い声が聞こえてきた。

「あら、久しぶりねえ…………… 修ちゃん？」

渡と篠塚にわかって修にわからないことがあった。それは甘い声を出している麻衣の服装のことである。いつもの服装は一流品を自然に着こなし、女性としてそして社長としての気品があった。しかし、今日は前面に女性を押し出し、超一流品を大胆に着飾っていた。

「ほーら…………… 早く乗ってえ」

「……………し、失礼します」

女郎蜘蛛に誘われる蠅のように、修は白塗りの蜘蛛の巣へと入っていった。蜘蛛と蠅のやり取りを渡は冷めた目で見ていた。姉が自分の親友を誘惑しようとしているのだ。冷めた目つきにもなる。

ガチャ…………

篠塚は渡が車に乗り込んだことを確認、さらに車の下と後部を確認、最後に後方から車が来ていないかを確認して運転席に乗り込んだ。

「それでは出発します」

白塗りのコールスモイスは静かに走り出した。

「そ・れ・でえ？ 私に何を聞きたいのお？」

「実はね姉貴、俺たちがやってる……？」

渡の問いかけに麻衣は知らんぷり、修の方をずっと見つめている。

「ねえ姉貴？ 聞いてんの？」

「渡、私はあなたの姉貴じゃないの。お姉様なの」

「ったく…… あの！！ お・姉・様！！ 実はですね！！」

「渡、声が大きいわ。修ちゃん代わりに説明してもらえるかしらあ」

渡の蜘蛛を見つめる目はまた冷たくなった。

「あ、はい。実はデート……」

「渡、今すぐ車から降りなさい」

麻衣は修の話をさえぎり、ドアを指差しながら言い放った。

「え!?! なんですよ!?!」

「修ちゃんが私にデートのお誘いをしようとしてるのよ!?! 空気を読みなさい。ほら、ドア開けてジュワッキーみたく飛び降りなさい」

「せめて止まってから降ろしなさいよ!?!」

「あの…… お、お姉様? すみません、デートのお誘いじゃないんです」

「えっ? お誘いじゃないのお? 残念だわあ……」

「すみません…… お、お姉様」

「麻衣でいいわあ」

「へっ?」

「お姉様ではなく、麻衣って呼んでえ」

修の右手を両手で包みながら麻衣は少し身を乗り出した。

「俺の親友に色目使うのやめてもらえる? ああ、やっぱりいや、修の手を握ってていいから俺の話を聞いてもらえる?」

「うん……」

即答だった。

「今ね、何でも屋にデートコースを決めてもらいたいっていう依頼が来てるんだよ。それで、依頼主もそうなんだけどその彼女が外国の人なんだ」

「うん…」

「それで、あね… お・姉・様は大学、大学院とイギリスに行ってたでしょ？ その時、お・姉・様の事だからボーイフレンドの一人や二人いたでしょ。だから…」

「なるほどね」

麻衣は修の右手を名残惜しむようにゆっくりと離れた。

「イギリスじゃ私も外国人だものね、英国紳士がどうやって極東の美人をもてなしたかを知りたいのね？」

「さすが、麻衣… 麻衣お姉様。お察しの通りです」

親友の姉を名前だけで呼ぶことなど当然できない修はその呼び方にした。

「わかったわ、教えてあげるわぁ…」

今度は修の左手を包み込み身を乗り出す麻衣。

「だから、俺の親友に色目を使わないでもらえる？」

「いちいちうるさいわね！ そうね、英国紳士はブレナム宮殿へ連

れて行ってくれたわ。綺麗な造りの宮殿だったわあ。庭園も二人で散歩して優雅な時間を楽しめたわあ」

当然、修は小声でブレナム宮殿とは何かと渡に聞く。渡も麻衣の話に邪魔しないように小声で答えた。

「世界遺産の宮殿だよ。イギリス第61代首相のチャーチルが生まれた場所でもあるんだ。チャーチルは確か63代も首相を務めたかな？」

「ブレナム宮殿の次はコッツウオルズ。瞬きをするのがもつたいないほど、いえ、瞬きの回数だけシャッターをきりたくなるほど美しい所だったわあ」

修が小声で聞く前に渡が答えた。

「世界で一番綺麗と言われている村が点在している丘陵地帯のこと。本当に綺麗らしいよ」

「そのままストラトフォード・アポン・エイヴォンに行って……」

「修、ストラトフォード・アポン・エイヴォンってのは……」

説明しようとしている渡に修は手のひらを軽く突出し、渡の話をさえぎった。

「シェイクスピアの生まれたところだろ？」

「文学に関係していると詳しいんだね……」

何でも屋近くに着くまでの20分間、麻衣のイギリスでの優雅で情熱的な留学生活の話が続いた。役立つ情報も多かったが修と渡は疲れてきていた。一方、クラスメートの連絡先がある程度分かった知哉と重は、地元で働いている女子に話を聞くため街へと出かけていた。

第二話 よそでイチャつけ!! その5

「大先生、最初は誰のどこ?」

重の少し前を歩いてきた知哉は少しだけ振り向き重を見た。

「ちやみ智明ちゃんとかだね、ショッピングモールショッピングモールの化粧品売り場で働いてるって」

「へー化粧品ねー。そういえば中学2年ときの夏休み明け、すごい化粧品だったよな?」

「あー思い出した思い出した! そんな化粧品してた」

「けど10月頃には普通に戻ってなかったっけ?」

「ああ、それはね……」

重はこういう時には決まってメガネをあげる。

「一つ上の先輩、あの… ほら、バスケット部のカッコいい人」

「ああ、あの先輩な」

「その先輩に『黒髪で薄化粧のほうが可愛いよ』って言われたから戻したらしいよ」

「やっぱり恋が絡むわけね」

ようやく目的のショッピングモールに到着した二人。知哉は早速トイレに向かう。どこかに着いたとき、どこから出るときに決まってる知哉はトイレへと向かうのだ。

「わりい、それじゃ化粧品売り場に行くか」

「うん」

一階の入り口すぐの化粧品売り場へ歩いている二人は、久しぶりに会う同級生に少しだけ緊張していた。同性ならまだしも異性となると、どうも余計な緊張をしてしまう。

「ここだよ、知ちゃん」

「おう。んで、智明はいるのかな？」

化粧品売り場でキョロキョロする男二人組はかなり目立ち、二人が智明を見つけるよりも先に、智明のほうに二人が気が付いた。

「あれ？ ちょっと、大先生に知哉じゃない！」

聞き覚えがある声だったが、その声に少し女性らしさを感じた二人は、呼ばれたほうへ振り向くまでの短い間に緊張が増した。

「よ、よう」

「ひ、久しぶりだね、智明ちゃん」

二人のぎこちない再会の挨拶に智明は微笑む。その微笑みを見て知哉も重も同じことを感じた。

「元気そうだね」

「うん、二人も元気そうじゃん」

「おう」

喋り方は同級生ということもあってか、昔とさほど変わらない。が、表情がまるで昔と違っていた。表情は化粧のせいではなく、智明が大人の女性になったことが直接の原因だろう。

「それで、どうしたの？」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさあ」

「ふーん……ウチの商品をなんか買ってくれたら答えてあげる」

「えっ!？」

重は声を出す。それは当然のことだ。化粧品売り場で男が買うものなんて何もない。まあ買う人もいるだろうが、知哉と重には必要ないものばかりだ。

「何かって……どうする知ちゃん？」

「んー、そうだな……… あっ!」

ひらめきの声を出した知哉は、ニヤニヤしながら智明と重の顔を交互に見つめる。あまりにもしつこく見つめる知哉の顔にイラッとした智明と重。知哉のニヤついた顔は智明の右の平手、重の左の平

手で挟まれるようにして砕かれた。

ピシヤッ!!

「いつてえ!!! 何すんだ!!!」

「いいから早く話してよ知ちゃん!」

「ったくせつかちだな。あのー、あれだよ、椎名さんに口紅とファンデーションを買っていつてあげようぜ? ピエロのメイクかなんかに使えるだろ?」

珍しく良いアイデアを提案する知哉。重は心の中で『明日は大雨だな』と思っていた。

「そうだね、そうしようか」

「うーし、そうと決まったら……」

知哉は口紅がきれいに並べられている棚へ近づく。端から一本ずつ色を確認していく知哉は、ある一本の口紅を手に取り重に見せた。

「大先生!!! これなんかどうだ? 真っ赤も真っ赤、ピエロにうつてつけだろ!!! ピエロ専用って書いてけばもつと売れるのに、『通常の口紅より3倍速い』っていう売り文句もつけてさ、つーか3倍速いつてどう速いんだよ!? はははは……… はは……… は………」

知哉は隣にいたおばちゃんと同じ種類の口紅を持っていたことに気がついた。変な汗を流しだす知哉、それを見つめるおばちゃん。

「肅清してあげようか？」

「いや、その、あの……えっと、あの、す、すいませんでした！！」
おばちゃんは黙ってその場を離れた。

「ちょっと知ちゃん！！ 何してんの！！ 中学生みたいな悪ふざけやめなさいよ！！」

「わりい… なんかわかんないけどテンションあがっちゃって……」

「わりいじゃないわよ！！ ウチのお客さんなんだからね！！」

「ごめんごめん、まあほら取りあえずこれを一本買うから… な？」
智明に口紅を渡すと知哉はファンデーションの棚へと近づく。

「大先生！ いいのがあったぜ！ 見るよこれ、まさに白い悪魔だぜ。こんな真っ白のファンデーションなんかピエロしか使わな……」

先ほどのおばちゃんと同じファンデーションを手に持ち、知哉の横に立っていた。

「あつ…………… す、すいません…………… わ、若さゆえの過ちってことでの… 許し」

「肅清パーンチ！！！！！！」

おばちゃんの肅清パンチを甘んじて受ける知哉。それは当然のことであり、吹き飛ばされた後、丁寧な謝罪により、おばちゃんと知哉の間に停戦調停が結ばれたことは言うまでもない。

「あのね知ちゃん、ホントいい加減にしなよ？」

「本当よ！！ まったく……………」

智明は口紅とファンデーションを包装しながら文句を言う。

「はい、どうぞ。お・客・様……！」

「あ、はい、すみません……………」

「ったくもう…… あっ、ちょうど休憩時間だから上にあるチヨイザリヤで話さない？」

智明の提案でチヨイザリヤで話すことになった。知哉も重も昼食がまだだったので話すついでに済ますことにした。

「お持たせいたしました。和風おろしチキンカツ定食のお客様」

「あっ、オレです」

「冷やし山菜の三色茶そばのお客様」

「あ、僕です」

「ヘルシー夏御膳のお客様」

「私です」

頼んだものが全てそろい『いただきます』と同時にがつつく知哉と重。

「ね、ねえ？ 何か話があったんじゃないの？」

「ん？ あっそうだった実は……………」

知哉と重は交互にいきさつを説明した。何でも屋をやっている事、風変わりな依頼がきた事、そしてデートコースを決めるために話を聞きに来た事。それを説明していある間にメインは食べ終わり、重はお茶、知哉はコーヒ、智明は紅茶を飲んでいた。

「なるほどね、それで私のとこに来たんだ？」

「うん、そういうこと」

「デートね………… ありきたりだけどショッピングがいい」

「ショッピングか…………」

「うん、外国の人なら和風の物が買えるところに連れて行ったらどう？ 扇子とか浴衣とか以外にも、最近はUSBメモリーとかスマートフォンのカバーとか色んなものが和をイメージして作られてるのも多いらしいよ？」

知哉は思い出したようにタバコを取り出し、智明に見せた。

「これ、寄木のタバコケースなんだよ、こういうもんみたいな感じ

か？」

「そうそう、ちょっとした物なら留学で来てる学生さんたちにも買える金額だし」

「なるほど… それはいいね。 やっぱり智明ちゃんに聞いて正解だったよ！」

意外にいいアイデアを出せたな、と智明は満足げな顔をして紅茶を口に含みながら、ちらっと店内の時計に目をやった。

「あっゴメン、もう時間だ」

「ん？ そうか、今日はありがとな」

「依頼、上手くいくといいね」

「おう」

「あ、そうだお昼代…」

持っていた黒の財布を開けようとする智明。

「いいよ、俺らで払っておくから。 なぁ大先生？」

「そうそう、気にしないで」

智明は笑顔とありがとを残し売り場へと戻っていった。 それを見送り、知哉は爪楊枝をくわえ、重はメガネを拭いていた。

「ふうー、次はどこだい？」

「えーっと、次は未悠^{みゆう}ちゃんだね。このショッピングモールの裏のカルフォルニアロードにある銀行で働いてるらしいよ？」

「銀行員かー、いい仕事についたなあ…　　つーかよ、カルフォルニアロードってなんでカルフォルニアロードっていうんだ？　ひとつもアメリカ要素ねえぜ？」

「そついえばそつだね。なんでだろ？」

知哉がレシートを手に取ったのに合わせて重は席を立つ。だがなかなか立たない知哉に気付き、重はレシートをまじまじと見つめる知哉に話しかけた。

「どうしたの知ちゃん？」

「和風おろしチキンカツ定食よりヘルシー夏御膳のほうが800円も高い…」

「やっぱりお昼代もらっとけばよかったね…」

第二話 よそでイチャつけ！！ その6

会計を済ませた二人は、カルフォルニアロードへと向かう。十数メートル手前にカルフォルニアロードの看板があり、その看板が重の視界に入った。

「やっぱりアメリカンじゃないなあ……」

竹と木で作られた大きな看板には草書体のカタカナでカルフォニアロードと書かれている。そしてその先にあるロード内のすべての電柱には、その看板を小さくしたようなものが取り付けられていた。

「どこをどう見たって、カルフォルニアロードには見えねえーな」

二人はブツブツと言いながらも目的の銀行に到着した。ロングスタール銀行と書かれた大きな看板と建物が二人を待ち構えていた。二人のよく使う商店街にもロングスタール銀行はあるが、この店舗とは比較にならないぐらいの規模。ATM3台に受付3席といったところだ。

「すごいな……」

「うん……」

銀行内に入った二人は驚く。ATM12台、受付15席、受付以外の接客従業員6人もおり、そして何より清潔感に溢れている。入店してすぐに感動すら覚えてしまった二人に一人の女性従業員が声をかけた。

「ようこそ、いらっしやませ」

気品ある女性従業員は小汚い二人に深々と頭を下げた。何となく服装ミスったか？ と思っていた知哉と重は、女性従業員のきちっとした挨拶を気まずく感じていた。

「お客様、本日はどのようなご用件で？」

頭を上げ、その従業員は爽やかな笑顔を見せる。だが二人の顔を見ると、はっとした表情になった。

「知ちゃんに重ちゃん！？ 久しぶり！！」

そう、その出迎えた従業員が未悠みゆうだった。先ほどの智明以上の変貌ぶりに、知哉は当然の質問をする。

「未悠か？ 田渕未悠か？」
たがち

「うん、田渕未悠だよ」

重は何度もメガネを上げたり下げたりしながら未悠を見つめる。

「久しぶりだね、未悠ちゃん。なんかすっかり大人な女性になっちゃって」

「そうかな？」

「うん！！ そう！！」

懐かしの再会に喜ぶ三人だったが、周りの客の視線が気になった。

なぜなら、再会の嬉しさのあまり少し大きな声を上げてしまったからだ。未悠は直ぐにそれに気が付き、ものすごい早さで、二人をパーティーションで区切られた相談室へと連れ込んだ。

「それで、どうしたの？ 二人揃って？」

「いや、実は…… ちょっと前に修から電話もらってさ、大宇宙……」

パシッ

重が知哉の頬を軽くはたいた。

「どっから説明してんの！ 知ちゃんは黙っててよ、俺が説明するから」

重は先ほど智明に説明したような事を未悠に話した。もちろん、智明とのやり取りも丁寧に説明した。それを聞いていた未悠は何か思いついたようで、重が話し終わるとすぐにある提案を出した。

「そういうことならいい場所があるよ」

「いい場所？」

「映画館」

「映画館？」

未悠のありきたりな提案に二人は意外そうな顔を見せる。それもそのはず、渡と同じぐらいの頭の良さの未悠、そんな未悠の提案に

「その映画館はね普通とはちょっと違うのよ」

「ちょっと違う?」

「そう、私の知ってるその映画館は日本映画しか放映してないの。それで、外国の人も楽しめるように吹き替えと字幕の二つでやっているんだから」

重は『なるほど』とメガネを上げ、知哉は『へー』と身を乗り出す。

「しかも、吹き替えは座席についてるヘッドフォンから聞けるうえに、10ヶ国語の中から選んで聞くことが出来るんだよ?」

「それはすごいね! それなら今回の依頼にもびつたしだよ!」

「でしょ? まあ私は行ったことはないんだけどね…… で場所は」

「ちよちよちよつと! 行ったことないの?」

「うん、私のお姉ちゃんから聞いた話なの。お姉ちゃんの彼氏がイタリア人だったから、その映画館によく行ってみたい」

「あー、そういうことか。にしてもその映画館いいね、ねえ知ちゃん?」

知哉は渡のように片方の眉毛をピクツと上げて、修のような口調で喋り出した。

「そうだな、映画を通して日本の文化も学べるし、一般庶民の暮ら

しから日本人の基本的な物の捉え方、考え方も少しは理解してもら
えるかもしれないしな」

「重は『明日は大雪だな』と心の中で思っていた。

「おう、それじゃまた!!」

知哉と重は末悠に別れを告げて銀行を後にした。知哉はのびをし
ながら歩き出す。

「ふうー、大先生、お次はどこでございますかい?」

「何その喋り? ……次は佐紀ちゃんそこ」

「お料理上手の佐紀ちゃんねー、はいはい覚えておりますよー、そ
いじゃ参りましょう!」

「なんだかんだバカなんだな……」

「重となんだかんだバカは駅前の商店街へと向かった。修達四人が
いつも使用している商店街とは違い、非常に活気にあふれている商
店街で、その名も『ハキハキオレンジ商店街』。商店街の道とアー
ケードが優しいオレンジ色をしているため『ハキハキオレンジロー
ド』と呼ばれることもある。平日休日問わず人と活気で溢れている。

「おー、賑わつとりますなー」

「ホント、いつも活気があるよね…… てか、その喋りやめなよバ
カ」

「語尾をバカにするなよ大先生、やめるから……」

「わかったよ、んでね知ちゃん、佐紀ちゃんは喫茶店で働いておるんですよねー」

「……………」

「いやー、お料理上手の佐紀ちゃんのことですからあ？ これまた存分に腕を発揮しておられるのでしょね！！ こいつは楽しみだぜ！！ GETだぜ！！」

「いや、大先生、マジでやめるから許して……」

佐紀が働いている喫茶店は、商店街でも人気の店で名前は『喫茶Night & amp; Day』。コーヒーや紅茶などの飲み物が美味しいと評判の店。つまりは料理の評判がまいちだった。そんなときに佐紀が店で働くことになり、今では美味しい店として知られている。

「おお、いい感じの喫茶店じゃなか！」

「そうだね、やっぱり喫茶店はレトロ感があるほうが良いよね」

オレンジロードの一角にあるNight & amp; Dayをまじまじと見つめる二人。喫茶店は店というより、木工マイスターが丹精込めて作り上げた作品のようで、店先にある観葉植物と壁の木目が雰囲気を作り上げていた。

カランコロンッ

二人はサングラスをかけることもなく、エイリアンの腕を掴むこともなく店に入れた。店内はゆったりとしたジャズが流れ、シーリングファンが回り、バーと言っても過言ではなかった。

「いらっしやいませ」

清潔感のある白いシャツにシックな前掛けをした、爽やかな女性店員が二人を出迎えた。二人はますますここが気に入った。そして二人はお客様として席に案内された。

「ご注文がお決まりになりましたら、こちらのボタンを押してください」

「あつ、はい」

「あの、すみません」

一礼して戻ろうとする店員さんを知哉が呼び止める。

「すみません、ここで伊藤佐紀さんが働いていると聞いたんですが……」

「佐紀さんですか？ 佐紀さんなら、お隣のテーブルで休憩していますよ」

店員が指差したほうに目をやると、大量の料理が並べてあるテーブルが二人の視界に入った。そこでシェフの格好をして腕を組み、何やら悩んでいる佐紀の姿があった。

「ありがとうございます」

知哉と重は店員に礼を言つと、悩んでいる佐紀のテーブルへと移らせてもらった。

「よう佐紀!!」

「久しぶり佐紀ちゃん」

「ん？ あ!! 知哉君と重君じゃない!! 何よ!! どうしたのよ!!」

佐紀はかなり大きい声で驚く。

「あ、相変わらず声が大きな…」

「それが私のチャームポイントだからね!! カツカツカツカツカツ!!!!!!」

「ポイントイーってなんだよ？」

「なんか、何かがすごく増しちやってるよね……」

二人は圧倒されながらも席に着く。

「つか佐紀、この大量の料理は何？」

「うーん!! 知哉君これはね、私が作った新作の料理なの!!」

「新作？」

「そう！！ 近いうちに『秋の味覚祭』っていうのをナイティー&デイーでやるのよ！！ そのために私が考えた新作の料理なの！！」

「ナイティー&デイー？」

耳が『勘弁してください』というくらいの大声。この声で中学生の時に全国大声コンテスト3位というのだから、1、2位の声の大きさは余程なのだろう。

「何かを早めに減らさないと大変なことに……」

「なーに！！ 重君！！」

「あ、いや…… そのー、何か悩んでるような顔してたから……」

「ああ！！ それはね！！ 少し不安だったの！！ これを食べて皆が美味しいって言うってくれるかなーって！！！！」

「そういうことだったんだ」

ポンツ！！

佐紀は手のひらを叩き、何かひらめいたようだった。

「食べてよ！！」

「えっ？」

「私の料理！！ 食べてみてよ！！」

先ほど食べた料理が未だ消化しきれていない二人には、死刑宣告に近いものだった。

「いやー、悪い、あのー、さっき昼飯食べてきちゃったからさー」

「ちょっとまだパンパンなんだよね、おなか」

「えー！……！！ 食べてよ……！！ お金は取らないから……！！」

「いや、だから……」

「ねー！……！ 食べてよ……！！ ほらスパゲッティ だよ……！」

「スパゲッティ ってなんだよ？ …… ああスパゲッティ は合ってるか」

「はい……！ あーん……！！」

「ちょっと待って……！ 今日は話を聞きに来たんだよ、話を」

「は・な・し……？」

第二話 よそでイチャつけ!! その7

佐紀を何とか止めた知哉はいきさつを説明した。

「ふーん、スクランブルでそのままタッチダウン…… 千葉オイルサーディンズのクォーターバックもなかなかやるじゃない!!」

「いや、アメフトの話はしてないんだけど……」

「冗談よ!!」 「冗談!!」

千葉オイルサーディンズ。千葉県のアメフトチームであり、イワシが逃げ回るようなトリッキーな動きが特徴のワイドレシーバー、その動きに対応できるコントロールを持ったクォーターバックのパスプレーが武器のチーム。しかし近年、負け越しが続いており、昨シーズンに獲得した新人選手の活躍が、とこれはまた別のお話。

「それで、何の話だったけ？」

「デートコース!!」

たまらず重が声を張ってしまう。

「ああ!! そうそう!! 私はね、食べ歩き!!」

「あ、やっぱり?」

「何よ!! 重君!! やっぱりって!!」

佐紀は身を乗り出し、重の耳元で叫ぶ。

「のわっ！！ ちょっと勘弁してよ！！ 佐紀ちゃん！！」

「あのね、食文化っていうのは国の文化そのものなのよ！？ 特産品や名物、郷土料理なんかでその土地柄までわかるんだから！！」

重はやっぱりと言ったものの、先ほどからの女子の説得力に心酔していた。自分にもこれだけの説得力があれば、世間に妖怪の事もっと信じてもらえる、そう思っていた。

「どう？ 知哉君もいい案だと思うでしょ！！」

「え！？ あ、あぁいいと思うよ！！ けど食べ歩くにしてもいい場所がなきゃさー」

「……………」

あきれた様子で黙り込む佐紀は、ため息をほんの少しついたかと思つと、すごい勢いで息を吸い始めた。

「すう…………… 二人ともオレンジロードで何を見てきたの！？ いたるところにこのポスターが貼ってあったでしょ！！」

「ポスター？」

佐紀は、すぐ近くの壁に貼ってあったポスターを剥ぎ取り、二人の目の前に差し出した。そのポスターには、

『あれ？ これ何だか懐かしい、お袋の味がする… オイオイ、そ

んなわけ…… お…… お…… おふくろおおおフェスティバル」

と美しい田園風景の写真の上に力強く書いてあった。知哉から自然と声が漏れる。

「うーん、『フェスティバル』より『祭り』のほうが良いんじゃない？」

「うん、そこじゃねえよ！！」

重の脳天チヨップが知哉を襲う。痛む知哉をシカトして、重は佐紀のほうへと視線を戻した。

「なるほど、このオレンジロードで懐かしのお袋料理祭りを開催してるんだ」

「そうなの！！ だからデートコースにオレンジロードを入れれば間違いなしよ！！ この店に来てくれればサービスもしてあげるし！！」

「本当に！？ それはありがたいよ！！ ね？ 知ちゃん」

「え！？ ああ、そうだな！ それは助かる！！」

二人の言葉を聞き、佐紀は剥がしたポスターを丸めながらニヤニヤしだした。そして丸めたポスターでテーブルに置かれた大量の料理と知哉達二人を交互に指しはじめる。

「なんだろ知ちゃん」

「ああ、何だろうな」

「料理を食べろって言うてるの!!」

「ええ!？」

「ええ!？」

「ええ!？ じゃないでしょ!! 二人の話を聞いてあげた上に、いいアイデアも出したんだから、二人も私の料理を食べて感想のつや二つちょうだいよ!!」

「いや、でも……」

「いや、でも……」

「でももへちまもない!! いいから食べる!!」

「はい!! いただきます!!」

「はい!! いただきます!!」

相変わらず女子の説得力にまるで歯が立たない二人は、パンパン度80パーセントの状態です。料理を食べ始めた。二口、三口頬張ることに賞賛の言葉を送り続け、佐紀はその言葉を聞くたびに、うんうんと頷いた。そしてそれは最後の一口まで続いた。

「それじゃ二人ともまたね!!!!」

「はい…… さようなら…… うっぶ……」

「はい…… さようなら…… げぶっ……」

カランコロンッ

飽和状態に近い二人はN i g h t & a m p ; D a yを後にした。

「うう…… 牛のように胃袋が四つ欲しいよ…… 四つ欲しいよ……」

「耐えるんだ大先生…… 耐えるんつぶ!! あ、あぶね……」

二人はこれ以上の振動は命取りと判断し、近くの公園で一休みをすることにした。うつぶつぶ言いながら公園に入ってきた二人を見て、賢明な子供たちは十分な距離を置いた。

「うう…… 子供たちに蔑まれているような感じがするつぶ……」

「知ちゃん…… 今は何もしゃべらずに…… 消化促進の…… はっ……!!!」

「だ、大先生ええ!!」

ここにきて、常日頃から愛飲しているウーロン茶と、先ほど食べた冷やし山菜の三色茶そばが命取りとなった。当然、二人がそれを綺麗に片付けたのは言うまでもない。そして、その最中、知哉がもらいそうになったのも言うまでもない。

「ふう、ようやく落ち着いてきたよ……」

「だな、よし、最後は誰のどこ?」

「最後はね…… 小春ちゃんのことだね」

「うう、小春か… 少しは丸くなってるといいんだけどなー」

「元気にもほどがあるし、口調がきついからね小春ちゃんは……」

二人はゆつくりとした足取りで、何でも屋から近い所にある小春が働く八百屋へと向かう。その八百屋は小春の実家であり、小春は父親から継ぐつもりで働いている。もちろん父親もそのつもりでいたが、まさか本当に継いでくれるとは思ってもいなかったらしい。

「大先生も小春が八百屋を継ぐと思ってた？」

「何となくはね、だって小学校のときから手伝いしてたからね」

「そうか、俺は格闘家にもなるのかと思ってたよ」

「言いつけるよ?」

「だって本当に強かったじゃねえか!! 修の馬鹿と一緒に暇さえありゃトレーニングしてたしよ?」

「まあね」

15分ぐらい歩いたろうか、二人は何でも屋近くの『グラグラ商店街』に到着した。グラグラというのは銭湯の湯がグラグラ沸くところからきており、名前もなかった商店街のシンボルとなるように昔からある銭湯から名づけられた。だが奇しくも商店街は経営の面でグラグラしてしまっている。

「うー、ようやく着いたね」

「おう、今日は歩いたな…… 何か懐かしいなこの商店街」

「だね、小学校がこっちの方にあつたから当時はよく通つてたけど、中学以降は全く通らなくなつたからね」

「少し寂しい感じになつちやつてるな……」

「やっぱり、シヨッピングセンターが出来ちやつたからじゃない？」

「そうだな…… あつ、あれ小春じゃないか？」

「本当だ、小春ちゃんだ」

茶髪の長い髪を上にもとめ上げ、ねじり鉢巻きをし、茶色の前掛けに黒いビニールの長靴を履いた小春が、店先の野菜を並べながら威勢のいい声で紹介していた。その八百屋一帯は寂しさとは無縁のようだった。

「いらつしゃい！！ いらつしゃい！！ 今日はいりたけシメジにエリンギマイタケ、各種きのこがお買い得！！ きのこの炊き込みご飯で一足早い秋の味覚はいかがでしょうか！？ さあ安いよ安いよ……」

軽快に声を飛ばす小春に二人は近づき、知哉も軽快に話しかけた。

「よう小春！！ 久しぶりだな！！」

「そうそう、安いよ安いよ！！ 小春も安いよ！！ ……………安くなえよ！！ 誰だ！！ あたしが安いって言ったタコ野郎は！？ お前か！！」

小春は色々と勘違いし、たまたま通りかかった、サングラスをかけた頼りなさそうなサラリーマンの胸ぐらを掴んだ。

「ひいいいっ！！ 私は何も言ってますん！！ 言ってますん！！」

「似合いもしねえサングラスなんぞかけやがって！！ ゴボウで尻をひっぱたいてやろうか！？」

知哉と重は慌てて止めに入る。

「ちよちよちよちよちよっ、小春！！ 誰も小春を安いなんて言うてねえよ！！」

「しかも安いって言ったのは小春ちゃん自身でしょ！？ 知ちゃんが話しかけたただだよ！！」

「ああ？ 何だよ二人揃って？ 何の用だよ？」

あっさりと頼りなさそうなサラリーマンを離し、腕を組んで知哉と重を見つめる小春。知哉と重はとりあえず小春を無視し、頼りなさうなサラリーマンに謝り続けた。

「すいません！！ すいません！！ すいません！！！！！！」

「すいません！！ すいません！！ すいません！！！！！！」

「あ、ああ、い、いえ、とんでもない！！ とんでも…… によえ
——！！」

頼りなさうなサラリーマンは急に叫びだしたかと思うと、目にも

とまらぬ速さで逃げていく。なぜ逃げ出したのわからない二人は、不思議そうな表情のまま小春のほうへ振り返った。

ペシッ！！ ペシッ！！

「ごぼつを片手に立つ小春が、逃げ出したサラリーマンを見つめていた。知哉がすぐにそのゴボウを取り上げた。

「おい！！ なにゴボウ持ってんだ！！ 小春が勘違いしてあの人に迷惑をかけたんだろ！？」

「バカ言うな！！ 詫びにゴボウでもやろうと思ったら、あのタコ野郎が勘違いして逃げ出したんじゃないか！！」

「ゴボウでひっぱたくとか言うから勘違いしたんだろ！！ 全く……」

小春はブツブツ言う知哉からゴボウを取り、元の位置に戻した。

「んで？ 何の用だよ二人とも？」

ブツブツが止まない知哉の代わりに重が答える。

「い、いやー 実はさ………」

四度目になるいきさつ説明をする重。四度目にもなると説明の仕方もうまくなる。

「というわけなんだよ」

「なるほどな…… けどよ、ウチは牛の胃袋なんか扱ってねえぞ？」

「いや、そこじゃなくて！！ デートコースの事！！」

「ああ！！ デートコースの事を言ってやがったのか。悪りい悪りい」

「それで…… いつまでブツブツ言ってるの！！」

重は知哉の鼻にデコピン、つまりは鼻ピンを放つ。

「いてええええー！！」

「あ、ごめんね小春ちゃん。それで小春ちゃんはデートならどこがいいかな？」

「うーん…… そうだな」

小春は腕組みの方向を逆にして考え始めたが、考え始めて10秒も経たないうちに口を開いた。

「特にねえな」

「えっ？」

「だから、特にねえよ？」

「どこにも行かなくてもいいの？」

「おう、惚れた相手となら近所を散歩するだけでも楽しいだろ。二

人である時間をどこで楽しむかじゃなくってよ、どう楽しむかだろ？ 土手の河川敷で川見ながら、近くで買ったたい焼きかなんかを、茶でもすすりながら食べてるだけでも十分楽しめるだろ？」

「なんかすごく良いこと言ってる感じがする……」

「つたりめえよ。互いの誕生日とか正月、祝い事の日じゃどっか行きてえけどよ？ 互いにいつも腹を割って話してりゃ、おのずとどこに連れていったら喜ぶかもわかるだろ？」

「とんでもなく良いこと言ってる感じがする……」

「そうだろ、そうだろ……！ はっはっはっはっ………いつまで痛がってんだ知哉……！ 南瓜かぼちゃで殴りつけるぞ……！」

「ひいひい……！ せめて胡瓜きゅうりにして……！」

「よし、間をとって冬瓜とうがんにしてやる」

「威力増してるじゃねえか……！」

第二話 よそでイチャつけ!! その8

そのころ、何でも屋近くに着いた修達だったが、『まだまだ話足りないわあ』と麻衣が経営する会社へと無理やり連れていかれていた。麻衣はスケジュールを変更してまで話をといることで修と渡は断りきれなかった。そして二人はその会社で1時間2時間、ぶっとおしで麻衣と女性従業員の話をつき聞かされた。もう限界と修が何とか帰らなければならぬと話をつけ、ようやく何でも屋近くの十字路に車で送ってもらったのだった。

「うーん、今度はゆっくり話そうねえ。渡、それじゃ」

麻衣を乗せたコールスモイスは走り出し、降ろされた二人はフラフラと近くにあつたベンチへと腰掛けた。

「うう……… こんなこと言いたかないが、俺、教授の姉ちゃん苦手………」

「俺も、こんなこと言いたくないけど、実の姉貴が苦手………」

どつと疲れた二人はそのベンチから動けずにいた。大学の教授や漫談以上の喋りを2時間も聞かされた日には無理もない。

「ああ……… ああ……… ふうー、本当に疲れた……… ん?」

ベンチにもたれかかっている修の目に、大量の野菜が入ったビニール袋を手にした二人が見えた。

「教授、あれウチの馬鹿二人じゃねえか?」

「え？ ああ本当だ。でも何よあれ、大量の野菜を持ってるけど…」
「おーい！！ 野菜コンビー！！」

呼ばれた知哉と重は野菜コンビがすぐに自分たちの事だと分かった。何故なら先ほどすれ違った子供たちに『野菜マン』と言われたからだ。

「おー、どうだったよ？ 教授の姉ちゃんに話は聞けたのかよ？」

ベンチに先に着いた知哉が修に袋の中のきゅうりを一本渡しながら聞いた。

「おつ、美味そうなきゅうりじゃねえか。つーかどうしたんだよこの野菜？」

「小春に話を聞きにいったらよ』話聞いてやったんだから代わりに野菜買ってけ』って言われてよ」

「ははっ、そうかそうか。やっぱり八百屋継いだのか？」

「おつ、そうみてえ」

修がそのきゅうりをかじりだした時、歩くのが遅い重がベンチにたどり着いた。

「ふう、そっち二人も疲れてるみたいだね」

「そりゃそうだよ大先生…… 姉ちゃんが喋る喋るわで…… 近い

けど野菜もあるからさ、何でも屋までタクシーで行こうよ……」

「ああ」

「だね」

「おう」

四人はタクシーを拾い野菜を詰め込み何でも屋へと向かった。

「どうも運転手さん」

料金を払い、修はタクシーを見送り、教授を先頭に何でも屋の事務所へと入っていく。

「ぎゃー……！！！」

事務所に入った途端、渡は猛烈な勢いで踊り出した。

「モースモースミンミンミン、ケールマーニモンペ！！ モースモースミンミンミン、ケールマーニモンペ！！！」

「教授！！ 何だよどうしたんだよ！！ おい知哉、手伝え！！！」

修と知哉が二人がかりでようやく渡を止めた。

「落ち着けよ教授！！ 何だよどうしたんだよ！？？」

「ほら、深呼吸しろって深呼吸！！！」

二人が渡を落ち着かせている間、重は恐る恐る事務所の中に入ろうとした。だがその時、事務所の中から目元口元から血を流した真

っ白な顔の男が出てきた。

「うわああああ！！！　ゴボウゴボウゴボウ！！！！」

重はビニール袋の中からゴボウを取りだし、その血まみれの男をはたき始める。

「このっ！！　このっ！！　このっ！！」

「痛いっ！！　ちよつと重君！！　私だよ私！！」

そのやり取りに気付いた修が二人の間に割って入り止める。

「大先生！！　椎名さんだ！！　椎名さんだ！！」

「えっ！？　ああ！！　本当だ！！　すいませんすいません！！」

「いやいや大丈夫、こつちもこんなメイクしててごめんね」

よつやく落ち着いた渡が、椎名の顔を見つめる。

「それにしても怖すぎですよ！！　そのメイク！！」

「ごめんね渡君。みんなが帰ってくる間に新しいメイクを考えてて
た」

このちよつとしたパニックでさらに疲れた四人は、事務所の中で仮眠をとることにした。椎名は別に疲れていなかったが、気持ちよさそうに寝ている四人を見て、何となく一緒に寝てしまった。そして3時間後。

「うーし、仮眠もとったことだし、デートコースを決めるぞ!」

修はそう言うと、事務所から出て、工場内の空き部屋に作った会議室へと向かった。

「ねえねえ渡君。修君はなんでわざわざ事務所の外から工場に行くのかな?」

椎名がデートコースを決めるための資料を持ちながら聞いた。

「……………バカだからじゃないですかね?」

渡はノートパソコンを閉じながら答え、二人は新たに作った事務所と工場とをつなぐ通路を歩いていく。この通路は知哉が考え、作ったもので、事務所内部から工場内部にある会議室へと直通しているのである。修もこのことは知っており、作る際も手伝っている。だが修は『しつかり&バカ』という性格のため、いつもこの通路の事を忘れている。

「大先生、何やってんだ?」

「ん? ああ、さつき小春ちゃんのとこで買ってきた野菜を切ってるんだよ。スティック状に切っておけば、会議中に食べられるでしょ?」

「いいねえ。あつ、まだ味噌残ってるっけ?」

「大丈夫、残ってるよ」

「いいねえ」

知哉は5つのコップと麦茶の入ったガラス製のポットをお盆にのせ、会議室へと向かった。重も野菜スティック、味噌、マヨネーズを盛り付けた皿を持ち、知哉の後に続いた。

「あのな、俺はバカだから中の通路を忘れてるわけじゃねえんだよ」
修はキャスター付きのイスに座り、のびをする。

「ふああ……俺は会議が長引くかと思って、事務所の引き戸のところに『休憩中』の札を掛けにいったんだよ」

「ああ、そういうことだったの？ ごめんごめん」

「つつたく、おつ、全員そろったな」

知哉がコップにお茶を入れ、それを修が配り、渡が5分でまとめたデートコースの資料を重が配り、椎名はホワイトボードの前に立った。

「ホワイトボードには僕が書くよ」

「え？ 椎名さん俺やりますよ？」

「あ、いいよいよ修君。デートコースの依頼は僕あんまり手伝えてないし、これくらいはやらせてよ」

「それじゃ、お願いします」

椎名は頷きホワイトボードに何やら書き始めた。

『第一回デートコース決定会議』

それはホワイトボードの3分の1のスペースを占めていた。

「やっぱ俺が書きます」

「えっ？」

「いや、こういうもんは年下が書くもんですから……」

修はホワイトボードを一度綺麗にして、適当なスペースを使って先ほどの議題を書いた。

「んじゃ、始めるか……取りあえず、お互いが聞き込みで得た情報を整理していくか」

まずは知哉と重がクラスメート四人から聞いた事を話した。続いて渡が麻衣と50人の女性従業員から聞いた事を話した。修はその情報をホワイトボードに箇条書きで簡潔に書いていく。椎名はきゅうりに味噌をつけて食べている。

「ざつとこんなもんか？ 意外と良い情報を集められたなあ」

「ちょっと修、ボードの真ん前に立たないですよ？ 見えないじゃん」

「ああ？ あ、わりいわりい」

何でも屋五人はパリポリパリポリ音をたてながらボードを眺める。

「教授のねえちゃ… お姉様の話は使えるんじゃないか？」

「修、別に今は姉貴がいないからその呼び方じゃなくていいんじゃないの？」

「ああ… そうか、そうだな。んんっ！！ 教授の姉ちゃんの話も今回の依頼に置き換えて考えると、神社とか寺とかかな？」

「そうだね、ありきたりな感じになっちゃうけど、やっぱり定番の名所は外せないかな？」

知哉と重も自分たちの調べてきた事を熱心に説明しだした。

「寺もいいけどよ、こっちは面白い映画館を見つけてきたんだぜ？」

互いの情報を理解しあうまで、そう時間はかからなかった。つまるところ、どの順番でデートコースに組み込むかが問題となった。修は何でも屋の中でも特にデートや恋愛に疎い人間、あからさまな態度でいい放つ。

「今、俺が書いた順番でいいんじゃないの？」

「ばっか！ そんなんで良いわけないだろ！ 寺行った後に飯食って映画館行って買い物して土手を散歩するってどんな… 意外にいいかもな…」

「何なんだよお前は？」

呆れながらきゅうりを食べる修。しかし、重は修の案に賛成のよ

うだった。

「そうだね、その流れでいいと思う。昼食は佐紀ちゃんのとこで食べるわけだから、その後の映画館で休みながら映画を見られるし、ねえ知ちゃん？」

「それもそうだな、佐紀の奴サービスするとか言ってたからな、変に散歩なんかして腹に刺激を送るのもマズそうだし、買い物中に…
… なんか困るしな？」

話を聞いていた教授も納得のようだった。

「確かにいい順番だね。寺とか神社も週末は混むし、早めに行つてすいてる時にゆっくり見るほうが良いかもね」

「だろ？ 俺はそこまで考えてちゃんと発言したんだ。椎名さんはどう思います？」

「いいと思うよ。あそこの土手沿いは夜景も綺麗だしね。ほら、工業地帯が広がってるからさー」

「ああ、言われてみればそうですね！ いいっすねー 椎名さんはいいとこに気付きますねえー！！」

「いやいや、それほどでも」

すんなりとデートコースが決まり、意気揚々の5人であったが、椎名が急に考え込んだ表情になった。

「ん？ どうしたんですか椎名さん？」

「え？ あ、いやね渡君、このデートコースで本当に大丈夫かどうか試した方がいいのかなっと思って」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

椎名の提案に黙る4人。それもそのはず、試すということは自分で試すしかないということ。さらに4人には彼女がいらない、となれば今回協力してくれた女性たちに協力をしてもらわなければいけない。場合によっては地獄と化す。そんなことを知らない椎名は話を続ける。

「よし、それじゃ今から電話して、空いてる日を聞いてみないと。早めに検証して直すところは直さないといけないから」

「ええ、まあ……」

「ええ、まあ……」

「ええ、まあ……」

「ええ、まあ……」

全く気乗りしない4人は仕方なく電話をかけた。そして3人はさらに気が乗らなくなった。

「なるほど、渡君のお姉さんと小春ちゃんは都合がつくんだね？」

「はい……」

「はい……」

「はい…」
「はい…」

当然、渡の返事は元気なものだった。

「うーん、小春ちゃんはどんな女の子なのかな？」

俄然やる気になった渡が素早く答える。

「修をもう少し口悪くした元気な女の子です!!」

「そうなんだ…… じゃ、重君がいいかな？ 男女間のバランスをとってさ」

「そうですね…」

「そうですね!!」

「そうですね…」

「そうですね!!」

渡に続き知哉も元気になりやる気が起こった。それもそのはず、渡の姉の麻衣に気に入られてるのは修であり、麻衣の相手を務めるのは修なのだ。

「よし、そうと決まれば後はやるだけだね!! それじゃ渡君と知哉君はそれぞれ二人に同行して客観的な立場から調査してみてくれる?」

「わかりました!!」

「わかりました!!」

それから数日後、修はレースの日傘を差しながら麻衣と街を歩いていた。

「修ちゃん、日傘くらい自分で差せるからいいのにい」

「い、いえ、俺が差すので大丈夫です」

「本当にい？ 優しいのね修ちゃんはあ」

「い、いやー、そんなことないですよ…」

二人の様子を少し離れたところから見つめる渡。

「修の格好は街に馴染んでるけど、まったく姉貴は何考えてんだか…」

街行く人が麻衣を見て一瞬ピクツとなっていた。

「修ちゃん、今日の私の服装どうかなあ？」

「大人らしさも可愛らしさもあっていいと思います……」

「本当にい？ よかった気に入ってもらえてえ」

黒と白のツートーンのドレス。いまにも何かしらを召喚するんじゃないかと思わせるドレスだった。

「そ、そういえばお姉様がつけてる香水、すごく良い香りですね」

修なりに気を利かして麻衣を褒める。香水嫌いな修にとってあま

り言いたくない褒め言葉だが。

「嬉しい、私のお気に入りの香水なお。今のままでもいい香りなんだけどお、汗が混ざるともつといい香りになるのお……言ってる意味わかるう？」

「あつ！！ ようやくお寺が見えましたよ！！」

大慌てで話をそらす修。姉の誘惑にドン引きの渡。一方、小春の食欲に言葉もない重、そして恐怖を覚える知哉。

「こ、小春ちゃん、すごい食欲だね……」

「ん？ そうか？ 大先生が小食なだけだろ？ 小食系男子ってか？ かつかつかつかつ！！」

佐紀の店で食事をする重と小春。佐紀も小春と久しぶりの再会だったので、大量の料理をサービスした。

「いやー、佐紀の料理は相変わらず抜群だな！！」

「あつたりまえよ！！ 私もたくさん修行してきたんだから！！」

「ちょ、ちよつと二人とも、声がデカいよ…… 他のお客さんに迷惑だつて」

「大丈夫よ！！ ウチに来てくれるお客さんは私が声の大きいこと知ってて来てるんだから！！ ね、お客さん！！」

佐紀は近くのテーブルで食事していたサラリーマンに話しかけた。

「え？ あ、はい」

「ん？」

「どうしたの小春ちゃん？」

「あの、スーツの奴どっかで見たことが…… あっ！！ この間の
！！」

小春が気付くよりも少し前にサラリーマンが気付いた。

「ひいひいっ！！ 何も言ってますん！！ 何も言ってますん！！
これ代金です！！ おつりはいりません！！ ご馳走様でした！
！！」

カランコロンッ！！！！

サラリーマンは大急ぎで店を後にした。ゴボウで尻を叩かれるかも
しれないからだ。

「なんだよ？ あたし何にも言っていないのに」

「そりゃ怖いイメージしかないでしょ？」

「だから謝ろうとしたんだろ！！ ったく、最近の男どもは小心者
しかいねえんだから！！ 小心系男子ってか？ かつかつかつ
！！」

重は決して口に出さなかったが、自分の気の強さにもう少し気付

いてほしいと、心の中で静かに思っていた。

「いやー食った食った！！ 佐紀、ご馳走様！！」

「どういたしまして！！」

「じゃ佐紀ちゃん、お会計いいかな？」

「うん！！ 全部で1500円ね！！」

「安いな！！」

「初回サービスよ！！ 初回サービス！！ あと……」

ポンツ！！ ポンツ！！ ポンツ！！

佐紀はレジのカウンターでカードにハンコを押し、それを小春に渡した。

「ん？ なんだこれ？」

「ポイントカードよ！！」

「ポイント？」

その頃、映画館では麻衣を含めた女性の悲鳴が館内に響いていた。

「つたく、なんで今日に限って四谷怪談なんだ……」

「きゃー……！ お岩さん、もう許してえ……！ きゃー……！」

他の外国人は母国語で映画を楽しむためにヘッドフォンをしていたが、修は悲鳴を緩和するために、スイッチを入れずにヘッドフォンをしていた。だが、そのヘッドフォンが急に外された。

「ん？」

「フランス語で聞いているのに怖い！！ きゃー！！！」

「ちょ、ちょっとお姉様！！ わざわざ、俺のヘッドフォン取って
言わないでくださいよ！！ ん？」

修は叫ぶ麻衣の向こうに必死になって踊りを踊ってる人間を見つけた。

「あのバカ……」

「モースモースミンミン、ケールマーニモンペ！！ モースモ
ースミンミン、ケールマーニモンペ！！」

「すみませんお客様、上映中のダンスはちょっと……」

「だってお岩さんが！！ きゃー！！ モースモースミンミン、
ケールマーニモンペ！！ モースモースミンミン、ケールマー
ニモンペ！！」

「お客様、インドからお越しのようですが日本では……」

「僕は日本人です！！ きゃー！！ モースモースミンミン、
ケールマーニモンペ！！ モースモースミンミン、ケールマー

第二話 よそでイチャつけ！！ その9（第二話終）

気の遠くなるような長い一日がようやく終わり、四人は何でも屋へと帰ってきた。

「……………」

体に蓄えた疲れごとソファに座る4人。精神的な疲労が四人を黙らせ、眠気を誘う。だが、いつでも眠れる状態にある4人の頭の中には、やらなければならぬ事が思い浮かんでいる。今日の結果をもとに、もう一度二度と会議をしなくてはならない。

「とりあえずは寝るか？」

修の一言に静かにうなづく3人。だがダラダラと長い時間寝るわけにはいかない。依頼人の杉田のデートまでは数日しかないからだ。少しの仮眠をとった4人は気合いを入れなおして会議にのぞんだ。ああでもないこうでもないと思いをぶつけ、良いところはそのままに、直すべきところは直すの繰り返し。前日までかかったが何とかデートコースを作り上げた。

デートの日の朝早く、何でも屋4人は駅前の広場へとやってきていた。依頼人の杉田と待ち合わせをしていたのである。彼女のリーナが来る前に、今日のデートコースの最終確認をするためだ。

「あっ、メールが来た」

渡の携帯電話に杉田からのメールが届いた。ただ、他の3人はメールの内容より渡のメール受信音が気になっていた。その受信音の見当はついていたが、修は確認のためにとりあえず質問してみた。

「なあ教授、その受信音つてもしかして…」

「えっ？ ああ、うん、探してみるもんだね!!」

その受信音は『ケールマーニモンペ』のやつ…… といえはお分
かり頂けるだろう。

「ああ、それでね、メールだけ杉田君はもう待ち合わせの場所に
着いたらしいよ」

「んじゃ、早くいくか」

小走りを開始した4人の目に、杉田の姿が映った。が、イメージ
していなかった姿をしていた。姿というよりは何か横にいた。

「あ？ ちょっと聞いてないぞ？」

修の声に4人は全力疾走に切り替え、猛スピードで杉田に走り寄
る。

「はあはあはあ…… ちょっと… はあはあ杉田君……」

「はい？ 难道でしょうか渡先輩？」

渡は息を整えながら全力疾走した理由を指差した。

「？ え？ なんです？」

「この、このワンちゃんなに!？」

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？」

すつとんきょうな杉田に修も口を開く。

「言ってねえって！ どうすんだよ杉田君！！ 俺たちが作ったデ
ートコースは、ほとんどの場所はワンちゃんを中に入れられないん
だぞ！？」

「ええっ！？」

「ええっ！？ じゃないんだよ杉田君！！」

「こまったな… どうするリーナ？」

「ああ？」

杉田はしゃがんで犬の頭をなでる。嫌な予感しかしない修。

「ちよつと杉田君？ もしかして…」

「ええ、クライナー・ミンスターレンダーです」

「ちが… 犬種の話じゃねえよ！！ 今リーナって言ったろ！！」

「あれ、言いませんでしたっけ？」

「言ってねえよ！！ あっ、ちが… リーナとは言ったよ！！
そうじゃなくて彼女ってそのワンちゃんのことか！？」

「ええ、美人でしょ？ いや実は近々、コンテストに出場しようか
と思っっているんですよ！ そのために二人でいろいろ練習してまし
てね。ですがコンテスト出場経験者の方に話を聞いたらとてつもな
く過酷なものだったんです。」

僕にとつてリーナは友達でした。けど、友達のままじゃコンテスト
で上位は狙えません、より密接な関係になる必要があると思い、友
達としてはなく彼女として接してきました。ただ、あまり練習
ばかりしていたらリーナにストレスがかかります。なので練習のほ
かに、リーナが日常でもリラックスして楽しめるようにとデートコ
ースの依頼をしたわけなんです」

「……………」

修は黙って杉田のこを見つめ続ける。他の三人も同じだったが、
あるタイミングを計っていた。

「どうしたんですか？ 皆さん黙り込んで…… あっ！ い
やだなあー、心配しなくても大丈夫ですよ！ ちゃんと人間の彼女
もいますから！！ ナターシャっていう名前で……」

「このっ！…！」

修が素早く杉田の胸ぐらを掴み揺らし続ける。

「このこのこのこのっ！…！」

「うわああああ、どうしたんですか！？」

このタイミングを計っていた三人は修を止めに入り、渡が修をな
だめる。

「まあまあまあ修、落ち着いて落ち着いて」

「落ち着けて、最初からワンちゃんって言ってりゃ、あんな思いしなくてすんだんだ!!」

文句を言っている修の頭の中に、麻衣との壮絶なデートの景色が巡る。

「しょうがないよ修。杉田君も別に悪気があったわけじゃないんだし、ちよつと、ごう…… すれ違っちゃっただけだよ」

「そうだよ、落ち着けて修。俺も大先生も大変な目にあってんだから、修になんか言っちゃれよ大先生! …… 大先生?」

話をふった知哉は重の異変に気がつき、すぐに重もおさえにかか

「そうだよ!! 修の言うとおりだよ!! あのね杉田君、僕らは公園で信じられないくらい戻してるんだよ!? 後片付けも大変で、彼女役の子はとんでもなく荒々しくて……」

もちやもちやとモメる5人であったが、そのあと土手でリーナと楽しく遊んだのは言うまでもない。また、知哉だけリーナに吠え続けられたことも言うまでもない。

第二話 よそでイチャつけ！！ その9（第二話終）（後書き）

ちょっと無理があるところがありますが、見逃してください……

次回は、第二話「さよなら未確認」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1910t/>

何でも屋

2011年11月10日12時01分発行